

【論文】

1881年ポグロムに関する資料の分析（6）

黒川 知文

『ロシアにおける反ユダヤ主義ポグロム史資料集』（Материалы для истории антиеврейских погромов в России）の第2巻が1923年に、ペトログラードとモスクワにあるアレクセーエフ氏名称国立学術実務学校印刷所において1000部、国立出版局から出版されている。第2巻には クラスヌイ・アドモニによる編集と追加論文が追加されている。

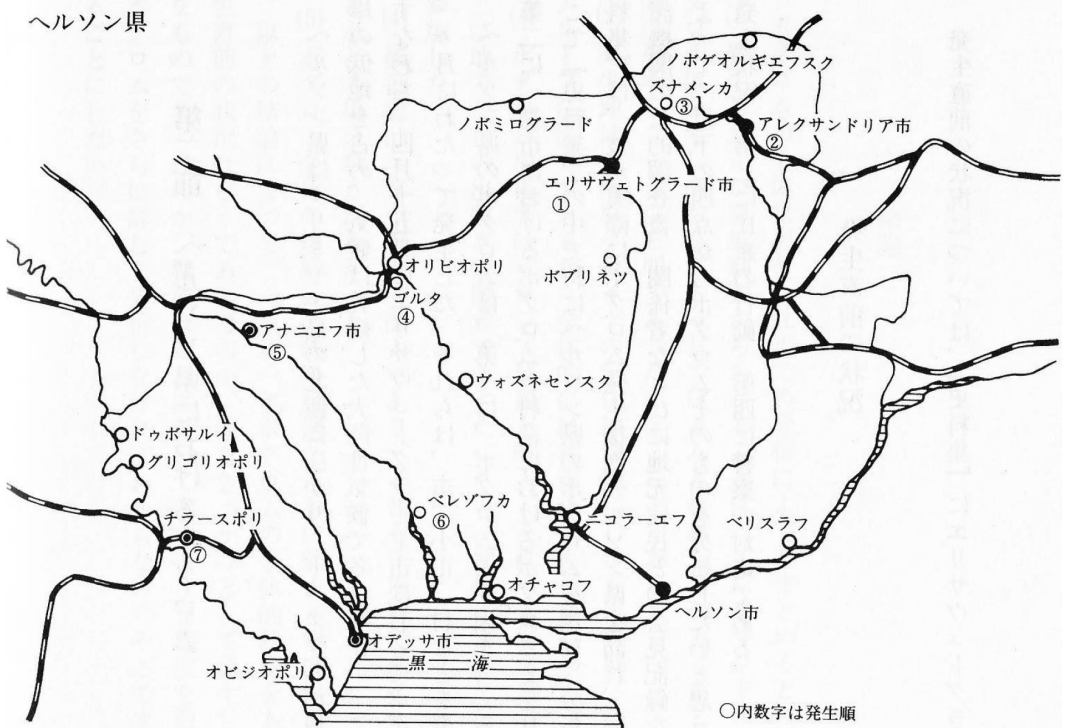
『資料集』第2部のクラスヌイ・アドモニによる編集資料を翻訳する前に、第1部公的資料の全残部である第201号から第229号までを翻訳する。原文においては傍注が付されているが、該当箇所に小文字で注を表記した。なお、地名に関しては、原文通りにロシア語表記にする。地図は著者が付記した。



地図6 ポグロム発生地

地図1 ポグロム発生地

拙著『ロシア社会とユダヤ人』ヨルダン社 1996年、107頁。



地図9 ヘルソン県におけるポグロム発生状況

地図2 ヘルソン県におけるポグロム発生状況

拙著『ロシア社会とユダヤ人』ヨルダン社 1996年、122頁。

第201号

ペテルブルク 内務大臣宛。ポルタヴァ発電報。1881年7月27日第4210号。
本日、ルブニの市庁舎に、百人ほどの町民が集まって、市外のユダヤ人をルブニから追放するよう要請した。説明すると、彼らは社会の平安を乱すことなくと内務省区解散した。県知事ビリバソフ。(L. d. 163)。

第202号

ペテルブルク 内務大臣宛。ポルタヴァ発電報。1881年7月28日付第4246号。

昨晚、ルブニのバザール広場にて、百人ほどの人が集まった。警察署長による説得もむなしく、町のユダヤ人経営の居酒屋や商店が2軒破壊された。1軒の居酒屋は町の近くにあった。鎮圧のために、軍隊が投入された。騒乱は鎮圧され、数人の首謀者が逮捕され、民衆は興奮した。県知事ビリバソフ。(L. d. 164)。

第 203 号

ポルタヴァ。県知事宛。

ルブニにおける、キリスト教徒のユダヤ人に対する反感に関して行われた閣下の御報告について、私は、閣下に、軍隊の利用を回避するために予防措置を精力的に講ずるよう要請する。遂行に関して閣下の報告をお待ちする。侍従武官長イグナチエフ伯爵。(L. d. 168)。

第 204 号

内務省。ポルタヴァ県知事より。官房扱い。極秘。1881年7月8日付第644号。ポルタヴァ。

内務大臣殿。

6月30日から7月1,2日にかけてペレヤスラフ市にて発生した騒乱の経過について、私が閣下に打った電報への補足として、以下ご報告いたします。6月7日、ペレヤスラフ市の住民は、町民だけではなく、他の階層の人々も、次の決議を採択した。すなわち、市外のユダヤ人がペレヤスラフ市に滞在することを禁止するように嘆願を出し、法律に従ってそれを市長に提出するという決議である。市長は、この決議が違法であるとわかったが、それを代表者に差し戻さず、それを私に提示するの遅れた。そのような優柔不断な態度のまま、30日が経過した。もちろん、これは、決議の作成者たちに知られるところとなり、彼らの上に重苦しい印象を与えた。彼らは、「このように優柔不断なのは、地元当局が彼らの利益を守ることを望んでいないからだ」と言った。この結果、彼らの間につねに存在するユダヤ人に対する苛立ちはますます募っていった。6月20日から、市において、かなり頻繁に、ユダヤ人とキリスト教徒の間に衝突や喧嘩が見られるようになった。これら

のすべての事件について、警察によって調書が作成された。我々は、調停裁判所にこれらについて一任している。この決定は、影響を与えなかったし、本質的に、それは当事者をなだめる性質のものではないのである。私は、上記の決議を受け取り、その後、電報にて、騒乱が発生したとの情報を入手した。ただちに県行政に関する上記の決議を検討し、副知事に対して、「これは非合法であるから却下するように。また、結果については、市長に打電し、それを公表するように命じなさい。決議の嘆願の中には、現在の反ユダヤ運動の要素があり、深刻な問題を含んでいるので、この写しを閣下に提出するように」と述べた上で、自ら鎮圧の指揮を取るために現地に赴いた。7月1日夜から2日にかけて現地に着き、警察署長や市長、管区裁判所、調停裁判所検事補、市に駐留する軍隊の2個騎兵中隊長から、この2日間に起こったことすべてについて報告を受けた後、私は、キリスト教徒住民を説得する必要があると考え、朝の9時に集合するように彼らに布告せよと命じた。

目撃者の証言と、発生地点の個人的視察から感知された6月30日の騒乱の実際の様子は、次のようなものである。6月30日午後5時頃、4人のキリスト教徒がユダヤ人と喧嘩した。喧嘩は殴り合いに発展した。バザール広場（発生現場）は、常に活気があり、みな騒音には慣れていた。かじ棒を持って武装し、近くに立っていたユダヤ人が、同胞を守るために割って入った。バザール広場にあったすべてのユダヤ人店舗が急いで鉤をかけて閉店し、店主は家に向かって駆け出した。群集がやってきた。荒くれ者たちが近くにあって商人カナヴェルの店に押し寄せた。群集の中からいくつかの石がカナヴェルの家の2階の窓に向けて投げつけられたが、そこからすぐに、銃が発射され、一人のキリスト教徒の耳に当たり傷ついた。これは、荒くれ者の何人かを制止し、逮捕するためにすでにそこにやっていた警察の目に留まった。これを目撃した警察署長が発砲した。群集の怒りは、狂乱状態にまで達した。群集は商店の並びに殺到したが、このとき呼び出された軍隊が到着し、商店を守るために配置されていたので、群集は押し返され、散らさ

れて、中心から放射線状に広がるすべての通りをつたって帰宅した。逃走する際に、彼らは、途中にあったユダヤ人の家の窓ガラスを割り、窓枠を壊した。2軒の家の部屋に、未成年の少年が押し入り、家具をいくつか破壊し、羽根布団を切り裂いて、中の羽を外にばらまいた。調査の際に、また、調査前に、広場において、26人が逮捕された。群集の中に、酔った人々はほんの数人しか見当たらず、ほぼ全員が完全に素面だった。7時頃、町の中心部は平静になった。町の中心部と郊外とを区別し、市内に誰も入れないようにするために軍の警戒線を敷くよう命令が下された。たそがれ時（9時頃）に、キリスト教徒が町の郊外に集結し、騒乱が再発したが、ユダヤ人の家屋は少数であった。乱暴行為の内容は次のとおり。窓枠、よろい戸、窓ガラスの破壊。家具が破壊され、羽根布団が切り裂かれたのは4軒だけであった。翌日、複数の小集団が同じような騒乱を起こした。その中でも激しやすい者30人ほどの集団は、コラヌィ村とアンドルシ村（ベレヤスラフ近郊。ドニエプル河岸）に向かった。これらの村や道中で、彼らは7軒のユダヤ人家屋の窓を破壊し、その一部の家具を破壊した。彼らはみな現行犯逮捕された。

地元の当局がどんなに途方にくれ、この事件を曲解しているかは、次のことから理解できる。「キリスト教徒である町人に、9時ごろ集まるように布告しなさい。彼らと会って、話をしたいから」と私が命令した時に、警察署長や他の人々は、私に「誰も来ないでしょう。来たとしても、数人でしょう」と言った。朝の8時からいくつかのグループが現れはじめ、群集が約2千人になった時に（全部でおよそ4千人になった）、貴族指導者と市長は、彼らのもとに行き、幾人かと対話し、人々に、非常に悪意に満ちた雰囲気であり、誰とも話しができないほどの敵意に満ちていると述べ、私に対して「彼らの前には出ないでください。彼らに暴力をふるわれる恐れがありますから」と述べた。この時、市長は、このような心配から、彼らに対して、私が彼らの決議を拒絶したことを伝える電報について触れなかった。私は、この心配を根拠なきものと考え、他の提案——私が兵隊に取り囲まれた状態で彼らの間に入っていき、隣の中庭に龍騎兵中隊を控えさせる——を拒

絶した。このような方法は、私の平和的説得という理念とまるで調和しないからだ。そのため、私は、彼らに、市役所に行って、自分たちの中から全権代表者を何人か選べ、その後で私が行って説明をする、と伝えた。そして私は、市役所の近くにいた龍騎兵小隊に、しばらく他の場所に行くようにと言い、市役所の近くに一人も兵士が立つことのないように監視せよ、と命令した。私が近づくと、群集はみな、帽子を取って、非常にうやうやしくお辞儀をした。彼らの真中に入っていくと、私は、彼らの行動がいかに不合理であり、リンチや暴力がいかにキリストの教えと矛盾するかすべて説明した。説得の最中に私は彼らに次のように述べた。「おまえたちの決議を私は認めない。違法だからだ。非合法なことを私は誰のためにであれ、けっして行うことはしない」と。またこの際に、私は次のようにも述べた。「この決議を、内務大臣閣下にした。結果は閣下次第であり、いかなる結果も出ないかもしれないし、何らかの進展があるかもしれない。今回のケースは、皇帝の命令を待たねばならないだろう。というのも、おまえたちの請願は、法律の改正を必要とするからだ。すべての法律は皇帝によって発布される。皇帝以外、誰も法律を変えることはできない」彼ら全員が、今後一切リンチも騒乱も行わず、むしろ、すべてを停止し、以前と同様に平和で正直で従順に生活することを真摯に約束した時に、やっと説得は終了した。この際、彼らは、「わたしらを守り、赦し、ユダヤ人の搾取から守ってくだされ」と嘆願してきた。説明の途中で、彼らは「群集に発砲したユダヤ商人カナヴェルは自由なままだが、カナヴェルが耳を打ち抜いたキリスト教徒の町人は逮捕されている」と述べた。警察署長の報告から、私は彼が自分の目でカナヴェルの発砲を見たことを確信し、すぐさま彼を逮捕するように命じた。というのも、ここに警察の職員と監視員の2人を派遣してもらうためであった。「自分が個人的に知っている、ある一人のユダヤ商人が、自分に向かって、『ユダヤ人は、キリスト教徒の血の海の中をひざまでつかりながら歩き回り、ロシア正教徒の死体を踏みつけて行くぞ』と脅した」という話を聞いて、私は、このユダヤ人を逮捕するために2人の警官を派遣した。これと似た出来

事がいくつか起こった。彼らの要請に応じて、私は、シャベルで頭に傷を負った人物を取り調べた。彼らが申し立てるとおり、彼は、四輪荷馬車に乗せられた死体の中にいた。すぐさま地元の病院に送るよう命令した。そこを立ち去る前に、彼らは、もう二度と秩序を乱さず、静かにしていることを再度誓った上で、逮捕された人々を釈放して欲しいと願い出てきた。これに対して、私は、「自分にはそうする権限がない。おまえたちの暴動の調査については、調査官に任せる。犯人たちは裁判にかけられるだろう。調査官は各逮捕者について取調べを行い、法律に照らして逮捕に当たらない者たちは釈放される。調査は、平静が回復次第、着手されるだろう。釈放される可能性のある逮捕者の釈放が早くなるか遅くなるかは彼らの罪の程度にかかっている。おまえたちの、『誠実に、平和に振舞う』という誓いを信じるから、私は、すぐに調査に取り掛かることにしよう」と述べた。私は、帰宅してから、検察官にすぐさま調査を開始するように要請した。それは、法律に照らして罪が軽い者たちを拘留状態から速やかに解放するためであった。私の帰宅後、すぐに全群集が私の家の前の広場にやってきた。私が彼らの前に出ると、彼らは、みな跪いて、逮捕者を釈放して欲しいと嘆願した。群集の前に逮捕者の妻と子供たちが進み出て、号泣した。この時、隣の通りから叫び声がした。「ユダヤ人がキリスト教徒を殴打している」全群集が声の方に向かって突進した。私が急いで外套を羽織って、馬車に乗り込む間に、群集は一人もいなくなってしまうていた。近くの通りで私は、彼らに追いついた。そのとき、すでに群れは小さなグループに分かれていた。実際に、ユダヤ人がキリスト教徒に対して暴力をふるったという事実があるかどうかは、まだ確認されていない。しかし、前方のグループとともに走っていた県憲兵副局長陸軍中尉プレチュコによれば、この前方を走っていたグループが、棒で武装したユダヤ人の集団によって道をさえぎられたという。殴り合いの喧嘩が始まったきっかけは、ユダヤ人群集の後方にいた者の一人が投げた棒が、プレチュコの頭のわきをかすめたことにあった。武装していなかったキリスト教徒たちが、武装したユダヤ人の群集にめがけて突進し、棒を投げた者をつ

かまえて、殴り始めた。プレチュコは、ほとんど力づくで彼を群集から引き離し、これらの町人たちの手に渡し、「彼には手をつけるな。警察に連れていけ」と命令した（現場に警察はいなかった）。この信任に、町人たちは非常に満足し、プレチュコの命令を正確に履行した。そのとき、他の場所において、ユダヤ教のシナゴークから、群集に向けて発砲があった（龍騎兵軍の下士官と4人の兵卒による）。私個人は、ユダヤ人の大きな集団は見なかったが、棒で武装した大勢の人々がばらばらに走っているのを見た。私が進んでいる時に、町人の集団が、私の馬車に駆け寄ってきて、言った。「今、近くの家から発砲があり、その中からユダヤ人が走り出てきました。私は、2人のユダヤ人が編み垣をとおって走っているのを見ました」私は、彼らを指さし、近くにいた騎上の士官に向かって、叫んだ。「彼らを捕まえろ！」士官は、編み垣や他の障害物を越えて駆け出し、数分後に2人のユダヤ人を連れ帰った。彼らは逮捕された。ところが、発砲があった家（発砲があったかどうか未確認）は、外から鍵がかけられてあった。すぐに（女家主が？）呼び出された。彼女は、鍵を紛失したと説明した。鍵を壊すと、家の中には、ユダヤ人の男女がいた。私は彼らを逮捕した（この両者の逮捕は、彼らの罪のためではなく、群集の怒りから彼らを守るためであった）。町人のグループは、私に向かってこう言った。「某ユダヤ人の蔵には、武器が貯蔵されています」と。私はそこに出向いて、私の立会いのもとに、蔵を開けた。中には、約12人の若いユダヤ人の子供たちが閉じ込められていた。この機会を利用して、私は、町人たちの懸念が、いかに根拠のないものであるかを暴き、心を落ち着けて、解散するよう説得した。彼らは一人二人とその場を立ち去りはじめた。そのとき、商人アレンシュテイン（富裕なユダヤ人。地方政府請負業者）は武器倉庫を持っていると誰かが言った。私は、この話が根拠がないことを確信しており、その証拠も持っていたが、群集の心を静めるために、また、アレンシュテインへの非難を取り去るためにも、このことを申し立てた、評判のある町人の立会いのもとで、アレンシュテインの倉庫を調査したが、何も発見されなかった。7月2日午前第1時に、町は平静にな

り、それ以降、騒乱は発生しなかった。騒乱の際に、51人のキリスト教徒と30人のユダヤ人が逮捕された。約166軒のユダヤ人家屋が破壊され、そのほとんどすべての窓ガラスや窓枠が破壊された。そのうち6軒では、家具がいくつか破壊された。この家主が被った損害額は1150ルーブルに上った。窓ガラスを割られ、窓枠を壊された残りの160軒の家の損害額は、四捨五入するとそれぞれ10ルーブルであり、合計すると、2750ルーブルに上るだろう。

7月2日に集まった4千人の群集の中には、酔っ払いは一人もいなかった。群集の憎悪は顕著であった。彼らは憎悪から来る苛立ちの気持ちを表明した。自分がいかにユダヤ人に経済的に依存しているかを泣きながら話す者もいた。ペレヤスラフを立ち去る前に、私は、コラン村に行った。この村には、当地とアンドルーシャ村で起こった騒乱において逮捕された人々全員が集められていた。彼らにも説得を行ったが、彼らはみなまったくおとなしなかった。自分たちの行為は、酔った上でのことであると言い訳していた。また、ユダヤ人への経済的依存を軽減してくれるよう涙ながらに哀願した。ペレヤスラフと郊外において起こった騒乱の外的側面は、このようなものであった。すなわち、群集による騒乱と街路での騒乱があった。略奪や個人に対する暴行はまったく起こらなかった。ユダヤ人社会の代表者たちが私に次のように述べた。「ユダヤ人の病院には、騒乱の際に手や足で殴打されて不具になった人々がたくさん入院している」そこで、私は、自らこの病院に向いた。現在入院しているのは、2人であった。一人は、ユダヤ人女性であり、私の質問に答えてこう言った。「荒れ狂った暴徒に驚いて、自分の家の屋根裏に隠れたが、そこから落ちて、腕を怪我した」もう一人は、ユダヤ人の老人である。彼は、次のように述べた。「6月30日に、町人の群集が通りを走っていた。自分は、わきに走り寄ろうとしたが、間に合わなかった。群集が私に追いつき、誰かが（彼の顔を見ていない）私の後頭部を殴った。私は地面に倒れ、怪我をした（こめかみにひっかき傷がついた）」医者によれば、どちらの怪我也たいしたことはなく、確実にすぐに回復するという。7

月2日、調査が開始された。検事補は、逮捕者の罪状が、ペレヤスラフ市の逮捕された家長たち——警察は彼らをよく知っている——の過失でしかなく、過失は調停裁判所が課す刑法にしたがって罰せられるものでしかないということを見て、彼らを警察の監視下から解放した。

上記の騒乱に関する全面的な原因調査から私は次のような確信を得た。1) この県においては政治的な要素はまったく存在しない。犯罪的なプロパガンダの影響を示すものは何もないだけではなく、この場合、いかなる影響も見られないことは明らかであり、本件は完全に地方的な性格を持つ事件である。2) 騒乱の発生以前と最中において、キリスト教徒たちに悪影響を与えた人物も、教唆者もまったく存在しない。このきわめて重要な状況は、私が招いたユダヤ人社会代表者たちが類似した現象を指摘していることから証明される。彼らのうちの一人が、彼の耳に届いた噂話を根拠に、なんらかの人物を教唆者と指摘すると、他の代表者たちはすぐさま彼の発言が根拠のないものであることを示し、この人物がまったく信頼に足ることを証明した。3) 宗教的な幻想がまったく存在しないことは明らかである。4) 実質的で、唯一の原因は、ユダヤ人による経済的な圧迫である。すべてのキリスト教徒、ペレヤスラフ市民が、声をそろえて、経済面におけるユダヤ人依存に憤りを表した。ペレヤスラフ市に住む商人（その数は非常に小さい）や他の階層のキリスト教徒は騒乱に参加しなかった。それゆえ、この原因はその大規模な発展にのみ帰せられるのであり、それらがユダヤ住民による経済的な抑圧によって引き起こされたのでは決してないのである。もちろん、当然のことながら、彼ら自身が非常に裕福であるから、ユダヤ人がこのように自分たちを圧迫しているなどという感覚はなかったのであるが。町の住民全般、とくに、貧しいキリスト教徒——彼らは、キリスト教徒とユダヤ教徒の間の関係を異常化する原因となり、6月30日の騒乱の原因となったと考えられている——に影響を与えるペレヤスラフ市の経済的な状況は、自らの現象と意味において、敵対的な関係の継続に影響を与える恒常的な原因であり、現在この時間において、結果として敵対関係を実際に生み出している一時的な原

因でもある。

ペレヤスラフ市のキリスト教徒とユダヤ教徒間の敵意の土台となっている恒常的状态について記す際に、私は、あらかじめ次の点について断っておく必要があるだろう。私は、ユダヤ人住民が一箇所に密集して住んでいるということや、彼らの共同体制度、ユダヤ人は重労働である農業に従事しようとしないうこと、その他類似した、一般的、普遍的な状態については触れない。

これらは、万人がよく知っていることであり、つねにどこにおいても、人種間の相互関係に影響を与えている要素だからである。これがペレヤスラフ市にもかなりの影響を与えていることは疑うべくもない。私は、閣下に、一般的な事柄を越えた、とくにペレヤスラフ市において起こっている、絶えずその方向に動いている状態にのみ注意を向けていただきたい。ペレヤスラフ市は、約16000人の人口を有し、その半数以上がユダヤ人である。市条例(35条)に基づいて、非キリスト教徒の地方議会議員の数は、地方議会議員の総数の3分の1を越えてはならない。さらに、市条例第63条によれば、地方議会は、3分の1の議員が出席した場合に有効となり、その決定は法律とみなされる。いくつかのさらに重要な案件に関しては(67条)、地方議会議員総数の半数が出席した場合に有効となる。しかし、この際に、議会に参加するキリスト教徒と非キリスト教徒の比率については、法律はいかなる規定もしていない。ペレヤスラフ市の全議員60名の中で20名がユダヤ人である。法律によれば、この数字は、議会開催にとって十分な数字である。上記の法律を文字通りペレヤスラフ市に適用し、ユダヤ系議員が全員議会に出席すると、彼らは参加者の中で多数派を形成してしまう。かくして、すべてのペレヤスラフ市の問題はすべて、ユダヤ人に有利に決定されてしまう。このひとつを見ただけで、町のキリスト教徒住民がユダヤ人に対してどのような状態にあるかがわかる。市長や他の人々が証明したところによれば、ペレヤスラフ市のバザールでは、ユダヤ人を除外してはものを何一つ買うことができない。このような搾取の構造をユダヤ人は次のようにして築き上げた。すなわち、ペレヤスラフ市には、パンの買い付けを行う外国企業のエージェントとして働くユダヤ人が住んでいる。これ

らのエージェントは、町にいたるすべての道の途中、18露里の地点の原っぱの真中に倉庫を建てた。ペレヤスラフにパンを運ぶバザールの日に、パンを買い占める、ドニエプル河を伝って外国に運ぶために引き渡す。何人かの仲買人が彼らの商売を真似して、郊外に出かけ、すべての食料品を買い占め、自分たちが建てた倉庫に貯蔵した。この食料品を農民たちは町のバザールに運ぶ。その後で、これを町にある自分の店に移送する。多くの人々が普通に公然と仲買を行っている。警察（16000人の住民に対して16人の警察職員）は、この悪用に対して実際的な対抗策を講じる可能性を示していない。町の側からも、すでに述べた状態のゆえに、この方法に対していかなる対抗策も講じていない。これらや、他のいくつかの状況は、それほど大きな意味を持つものではないが、一貫して絶えず影響を与え続け、ペレヤスラフ市のユダヤ人とキリスト教徒の間の敵対関係を支え続けているのである。そのような方向に絶えず作用しているこれらの状態とは無関係に、現在長い間続いている敵意には、偶然の原因もあったのである。

キエフやオデッサ、エリサヴェトグラード、その他の地での騒乱に参加した者に対して軍事法廷が加えた厳しい刑罰や、特に、裁判にかけられない人々に対して当局が許可した体罰、ユダヤ人の厳しい状況、彼らの権利の拡大の必要性を記した新聞や雑誌の記事、他の類似した状況は、ユダヤ人に、まったく当然の印象を与えた——しかし、それらが彼らにとって当然に感じられるということは、私は、望ましいことではないと思うが。つまり、彼らは、こういったことが、自分たちの立場——すなわち、当局から独占的な保護を受けているということ——の証明であると受け取っているのである（私は、ユダヤ人の見識の狭さについて述べているのである。彼らの大部分はそのような人々である）。これまで気づかれなかった、ユダヤ人の自信と極端な凶々しさが現われはじめた。似たような例がペレヤスラフにおいて起こり、ポルタヴァや他の都市でも目に付いた。小さな喧嘩が起こった際に、ユダヤ人は、もっとも厚顔無恥な方法で、この状況を現した。「ほら、今ユダヤ人は、キエフにおいて、キリスト教徒の血の中を歩き回っているではないか」などと述べたのである。

キリスト教徒である町人が、このようなユダヤ人の図々しい慢心した言葉を憎しみを持って聞き、これがたとえ殴り合いの喧嘩に必ずしも発展しなかったとしても、隠れた憎しみを増大させ、機会があればすぐにでも爆発する怒りの蓄積となったことは想像に難くない。ユダヤ人のこのような図々しさが殴り合いの喧嘩を誘発し、事件が調停裁判所にゆだねられたことがよくあった。ポルタヴァでは、似たような事件が起こり、私は、これについて検討する際に、調停裁判官に対して、ユダヤ人告発者の厚顔無恥を必ず厳しく処罰するよう要請した。このような措置は、争いを鎮める上で効果があった。信頼筋によれば、ペレヤスラフの調停裁判官は、類似した争いをユダヤ人に有利な判決を下す傾向にあるらしい。彼のこのような偏った判決に対しては、キリスト教徒である町人たちからも私のところに訴えが来ていた。私には、調停裁判官が下した決定を調査する権限があると思わないし、当局に対する信頼を揺り動かさないためにも、私は、過去に裁判にかけられた人々の誰かに質問することは適切だとは思わなかった。しかし、それなるがゆえに、その訴えがどの程度公正であるかを証明することもできないのである。類似した事件において調停裁判官が偏った判決を下すという傾向は、もちろん、安定を損ない、逆に、対立関係をも生み出した。対立感情は強まり、先鋭化した。キエフ当局が取った対策——ユダヤ人の人口調査——により、最近、キエフからペレヤスラフ市に百以上のユダヤ人家族が移住してきた（市長と警察署長の証言による）。キリスト教徒である町人の目から見ると、彼らはみな、貧しい手工業者か、もしくは、バザールの食料の仲買人をやったり、仕事を奪い取るなどして自活している小商人である。これらのすべての状況がペレヤスラフ市のキリスト教徒たちを警戒させ、市外のユダヤ人がペレヤスラフ市に引っ越してくることを禁止するよう嘆願させたのである。このことに関する決議は、法によって定められた規則に則り、市長に伝えられた。市長は、この決議の発布を遅らせた（13日間）。キリスト教徒たちは、この遅れを「市長は自分たちを助けたくないのだ」と解釈した。苛立ちが募り、衝突が頻繁に起こるようになった。調停裁判所の決定は、キリスト教徒を満足させていない。憤激は抑えることができないほど先鋭

化し、6月30日に爆発した。しかし、確信もって言えることは、もしユダヤ人が発砲しなければ、騒乱はそれほど大きな規模にはならなかったであろう、ということである。この不幸な発砲は、群集を怒らせ、後に騒乱に発展する乱暴行為に駆り立てた。

上述のことは、すべて騒乱の経過や、ベレヤスラフ市の産業経済状況を自ら観察することによって得られたものである。それを考慮しつつ、私は、次のような確信にいたった。すなわち、今回の例において、私は説明と説得によって騒乱を停止することができたわけだが、それにもかかわらず、町の産業経済生活が誤解の原因となり、敵対関係の悪化の原因となっている間は、いくぶん近い将来において騒乱が再発しないということを保証はできない。このため、私は、6月30日と7月1、2日の騒乱を引き起こした、キリスト教徒とユダヤ人との間にある異常な関係の原因を取り除く方法を探るために、委員会を設立することが必要と判断し、それをベレヤスラフ市において組織した。彼と郡会議長が、郡貴族会長を委員長とする委員会のメンバーとして招き入れられた。市長、検事補、警察署長も招聘され、私は県庁主席参事官を派遣した。委員会議長は、委員会に入れる地元住民（ユダヤ人とキリスト教徒）の選抜について、私から全権を委任されている。彼らの参加は、問題解決にとって有益であると認められるだろう。委員会のメンバーとの個人的な話し合いの中で、委員会において審議する可能性のある議題について、また、委員会がもっともよく従わねばならないと私が感じる意見に関して一般的な指示を与えた後で、私は、他のメンバーと同様に、特に議長に対して、審議の方向づけや対策の検討に際して、一方に偏った決定を回避し、各階層の権利を守り、信仰による差別をつけず、委員会の主要な目的——様々な信仰を持つ市民の間に階層的もしくは宗教的敵意の機会を与えない関係を構築すること——を考慮するように求めた。このことは、疑いもなく、キリスト教徒だけではなく、ユダヤ人も同様に求めているものである。上記について、閣下に判断をお委ねしつつ、私は、下記について報告することを自分の義務と考えております。調停裁判所の決定が一方に偏っているという非難があること——かかる状況は、私の管轄外のこ

とではあり、いかなる調査も行われず放置されている——を念頭におくと、私は、この問題について、法務大臣殿の権限において、管区裁判所長ルベンスキー殿か他の人物の仲介により調停裁判所の活動を査察することが望ましいと考えた。私がこの対策を望ましいと思うのは、一方では、もし安定性がゆらいでいることが明らかになった場合に、将来における裁判所の決定において、公平性を確立するためであるが、それだけではなく、反対に、調停裁判所の決定が公平であることが明らかになった場合には、かかる身に覚えのない非難が調停裁判所に対して二度と起こらないようにするためでもある。軍隊の活動については、市の人口が密集している地域を守り、大勢の群集を散らし、彼らを追跡するために市当局が下したすべての命令は、軍隊によって、平和裏に、決然と遂行された。警官の横暴もしくは不参加に対しては、誰からもいかなる訴えも私のもとに届いていない。彼らは自分たちの義務を忠実に、ゆらぐことなく果たした。彼らのすばらしい仕事ぶりについては、私が出発する7月3日にペレヤスラフに来ていた騎兵隊担当中将クリイロフに伝えておいた。以上、閣下にお知らせいたします。県知事ピリバソフ。(L. d. 170-187)

第 205 号

内務省。ポルタヴァ県知事より。官房扱い。秘書課。1881年7月28日。第769号。ポルタヴァ。内務大臣殿へ。

ボリスポリ村において起こった騒乱の原因を探り、住民の気持ちを鎮め、ペレヤスラフ郡での騒乱を鎮圧するためにペレヤスラフ郡に派遣されたポルタヴァ県副知事、四等文官ジュコフが次のように伝えてきた。ペレヤスラフ郡会より彼に届いた情報によれば、ボリスポリ村には、(ユダヤ人?) 952人を含む男女6991人が住んでいる。キリスト教徒のほとんど全員が農民であり、その大多数が自分の土地をもたず、収穫の半分を得るために、地主やユダヤ人借地者から土地を借りている。ユダヤ人借地者は、大きな領地の大部分を借りている。ユダヤ人は、土地を必要とする農民たちに、自分たちのことを「パン [=地主様]」と敬称で呼ぶように求めている一方で、彼らは、農民のことを「ホ

ロプ [=農奴である僕]』とか「セルコ (犬を表すニックネーム)」と呼んでいる。このようなユダヤ人の横柄さだけではなく、彼らが自ら土地を耕さず、当然の義務をも果たしていないということも、農民たちをいらだたせる原因となってきた。収穫の半分を納める際に、ユダヤ人は、その良質の部分を要求する。彼らは、穀物を収穫した後、借地人に対して、借地において家畜を放牧することを許さない。[たとえ許したとしても、] 放牧による損害金だけではなく、放牧料も徴収するのである。ユダヤ人はいつも、村人がもっとも金を欲しがると冬に労働者を雇う。彼らは、すべての取引において正式な契約を結び、契約違反の場合には、ほとんどの場合相手に違約金を払わせる。自分の店や穀物の買い付けや売却に際して、ユダヤ人は量目をごまかす。居酒屋において、彼らは、農民の妻や子供たちが父の家からこっそり持ち出した物をすべて受け取り、ヴォッカで支払う。ユダヤ人の家ではよく火事が起こるが、人々は、「ユダヤ人が保険金を得るために自分で家に火をつけたのだろう。保険金は農民よりもユダヤ人の家のほうが高いから」と考えている。人々がとくに憎んでいるのは、盗難にあった馬の横流しをしているユダヤ人である。この横流しが大変狡猾に行われるため、なくなった馬が見つかることはまったくないのである。この点において、ボリスポリの住民の評判は非常に悪く、ボリスポリのボグロムの際に、なぜ、かなりの数の盗難が起こったかがこれで説明できるのである。上記のすべてのことが原因となって人々の間に苛立ちが募り、それがボリスポリ村においてあまりにもひどくなったので、ペレヤスラフ警察署長を助けるためにクレメンチュク郡警察署長ツリコフと、フリシャツキー大尉率いる30人のコサックが現地に派遣された。コサック兵は7月11日に到着し、12日日曜日に、クレメンチュクの警察署長が、ボリスポリとヴォロニキ、ロゴゾヴァヤ、スコプツィの住民の感情を鎮めるために、これらの村を巡回し——行程は全部で70露里になる——、そこで寄り合いを開くよう命令した。ボリスポリの寄り合いには、すでに不吉な兆候が現れていた。群集のうしろの列から、「なぜコサックを遣した？俺たちはコサックなど恐れんぞ。必ずユダヤ人をやつつけるからな」と叫び声が聞こえた。しかし、家長たちが警察署長に次のよう

に言った。「叫んでいるのは、もう裁判で罰を受けた役立たずで、誰も奴らの言うことなど聞きはしません。暴動は起こりませんから。」

正午近くに、警察署長が、ポルタヴァ憲兵局副官プレチュコ大尉と郷警察署長を伴って外出した。そのため、ボリスポリの警察にはキリスト教に改宗したユダヤ人警官が一人より残っていなかった。12時に、通りと広場に、群集が集まり始めた。ユダヤ人は、次のように証言している。「1時に、鐘楼の一つから警鐘が34回聞こえてきた。この合図の後、彼らはユダヤ人の家に殺到した」と。しかし、様々な階層のキリスト教徒の誰に聞いても、そのような警鐘を聞いたと述べた者はいなかった。

1時に実際の襲撃が始まったということだけが確実である。最初、コサック兵は、鞭で群集を追い払っていたが、すぐに様々な場所に200人以上の群集が集まった。コサック兵が報告し、他の証言者も確認している情報によると、どうやら、男は家々に殺到し、その多くが乳飲み子をかかえた女や、娘、少女らが、家の周りを囲み、男が窓や鏡やドア、家具を破壊し、衣服や下着、篩[?]などを窓から外に投げ出すと、女や娘や子供たちがこれらをみな拾ってずたずたに引き裂いたり、粉々に砕いたりしたらしい。篩[?]は横にはなく、縦に長細い帯状に分解した。県副知事は自分の目でこれを見た。高価な物は隠して持ち去った。コサックがこのような家に近づくと、女たちが出迎え、乳飲み子を前に差し出して、こう叫んだ。「もしできるなら、打ってみやがれ!」と。何人かの家長たち、以前パツィルの郷長だった者、聖職者ラエフスキーとポリャンスキー、そして、何人かの貴族たちが、熱っぽく説得したが、殴られそうになり、立ち去らざるを得なかった。コサック大尉フリシャチツキーは、武器使用の権限をもっておらず、攻撃しても、群集は一時的に散らばるだけで後になるとすぐに別の場所に集まり、無効に終わるのを見て、5時間の労働によって疲れていた自分の手下のコサック兵たちを郵便局に集め、馬を休めるために、人々に下馬するように命じた。これが6時頃のことであった。この時からボグロムは、もう妨げるものも何もないままに遂行され始めた。居酒屋や酒蔵は壊され、醜悪な狂宴が始まった。男や女たち、そして、子供

たちもが、酒を飲んでいて、彼らは器を選ばなかった。手ですくって飲んでいて、多くの者がその場で倒れた。そのため、夜に、殺された人々を集める人々が、2人の酔っ払った男女を、死人と誤解して拾い集めてしまった。しかし、大多数の人々は、酔っ払ったために凶暴になっただけであるため、午前8時頃には、群集はすでに財産の破壊と略奪に飽いてしまっていた。群集は、ユダヤ人を殺そうと思い立った。目撃者は、この凶暴化した群集の恐るべき光景を描写することはできない、と言う。自分の財産が破壊されるのを黙って見ていたユダヤ人と、さらに寡黙だった彼らの妻と子供たちは、「おまえたちを殺すぞ」という声を聞くと、わっと泣き出し、号泣した。この泣き声は、猛り狂った群集の叫び声と混ざり合って、恐ろしい身の毛もよだつ印象を見る者に与えた。他方、ボリスポリから14露里の距離にあったロゴゾフにおいて、警察署長が騒乱が発生したとの報を受けたが、しかし、彼は、ボリスポリにすぐに戻るのではなく、16露里はなれた反対側の地スコプツィに向かった。スコプツィには、その時、プレチュコと、郷警察署長がおり、彼らを連れて戻るつもりだったからだ。この時間を浪費したため、彼はボリスポリによりやく夜8時になって戻ってきた。群集の恐ろしい雰囲気を感じた彼は、コサック大尉フリシャツキーに、暴動を鎮圧せよと命じた。フリシャツキーは、コサック兵に命じて、銃に弾を込めさせた。その後、警察署長と、郷警察署長とプレチュコは、34人のコサック兵を連れて、それぞれ、群集がいる場所に向けて出発した。大尉が率いる20人のコサック兵は、宿営にとどまり、残りの兵士は、警察署長や大尉プレチュコ、郷警察署長を護衛しながら、ばらばらに進んだため、彼らの間には、70歩ほどの間隔が生まれた。郷警察署長はすぐさま取り囲まれ、コサック兵から引き離され、広い通りにある地主トレボフの家に無理やり連れ去られたが、彼は民衆からかなり好感を持たれていたもので、何も害を加えられなかった。騒乱を中止するように説得していたプレチュコ大尉の話を、最初群集は聞こうとしたが、何人かが武器である杭や鉄製の物体を投げつけた。さらに、突然一人の酔っ払いが彼に向かって突進し、さお秤を勢いよく振り上げ、飾緒をつかんだ。プレチュコは鞭で彼を打ち、さらに

二人が自分の方に向かってくるのを見て、踵を返してコサック兵のもとに走りだしたが、レンガが背中当たり、倒れた。コサック兵は、襲い掛かった者たちを撃退し、プレチュコを警察署長の馬車のところに運んだ。これを見たフリシャツキーは、8人のコサック歩兵を援軍として送り、さらにその後8人を追加した。しかし、プレチュコを運んだコサック兵が警察署長の馬車に近づくと、群集の中からコサック兵や警察署長に向かって石や杭が投げつけられ、その後、群集はコサック兵に向かって突進し、肉弾戦となった。何人かが一人のコサック兵にしがみついて、彼を馬もろとも生石灰が入った穴の中に突き落とした。大乱闘が始まった。「撃て、撃て」という叫び声が聞こえると、群集の中からコサック兵に向かって2回の発砲があった。群集から後退しはじめたコサック兵は、すぐ近くまで来ていた者たちに向かって発砲した。5人が倒れた。群集は退き、四散した。そこに、なにか盥のようなものを叩く人を先頭に別の群集が現れた。彼らは、普通は鉄砲をかける肩の場所に杭をかけていた。警察署長は、群集の方向に空をめがけて発砲するように命じた。すると、群集は、同じように四散した。この後、警察署長とコサック兵は、さらに2度ほど村を巡回し、群集を解散させ、空に向かって発砲した。平静が完全に回復するまで、このようなことを繰り返した。ユダヤ人のなかで怪我をした者はいなかった。コサック兵のうち、16人が負傷し、4人が重傷であった。彼らはみなユダヤ人の家に泊まっていたので、コサック大尉を含む全員の持ち物が損害を受けた。家長の持ち物といっしょに破壊されたためだ。そのため、彼らには、自分の身に付けていたもの以外、何も残っていなかった。翌日、すべてがまったく平静だった。これは、村全体に酒もウォッカもまったく残っていなかったことが大きく貢献した。しかし、警察も予審判事も、アルハンゲロゴロツキー連隊1個大隊が到着するまで、新たな騒乱を恐れて、逮捕に踏み切ることを避け、逮捕されたのは、窃盗を犯した8人とどまった。死亡した4人と、負傷者1人（1日後に死亡）は、騒乱の中心人物であると判明した。彼らは、警察署長とコサック兵に襲い掛かった当人であった。彼らのうち1人は、証言者によれば、群集のリーダーであり、倉庫を破壊し、とくに、ユダヤ人の学校を

破壊し、そこにおいて、礼拝用具一式をまっさきに愚弄した。群集の中から発砲した人々が誰であるかは明らかではない。撃たれた弾も確認されていない。そのため、コサック兵が、火器を使用する必要があることをより強く訴えるためにこの話を捏造したか、もしくは、混乱や喧嘩の最中に彼らや警察署長の耳に〔実際に〕これらの発砲が聞こえた、と考えることができる（銃声が2発だという者もいれば、5発だと言う者もいるので、後者の説に分がある）。その日の夕刻、ボリスポリ付近のマルトゥソフカで、居酒屋が破壊と略奪の被害にあった。夜から7月14日にかけて、ボリスポリから15露里はなれたヴォロニコフにおいて、5軒の店が略奪され、6軒の民家の窓ガラスが割られた。そのうちの1軒では、家具が破壊された。ヴォロニコフでの騒乱の現場に、地元の郡貴族会議長ヴァシリコフスキーが現われ、民衆に凶暴行為をやめると説得した。敬意こそ払われたが、彼の言うことには誰も耳を貸さなかった。ヴォロニコフで発生した騒乱について人々は、ボリスポリにおける恐るべき鎮圧の例があるにもかかわらず、「クレメンチュクの警察署長が更迭され、暴徒に発砲したコサック兵が裁判にかけられている」との人々の間に広まっている噂にしたがって解釈されている。この噂をマルトゥソフカで広めた人々のうちの1人が、警察署長によって7月18日に逮捕された。警察署長を現地に派遣したのは県副知事であり、その目的は、彼の出現によって、彼が更迭されていないことを証明することにあつた。県副知事殿の調査においても、また、憲兵局将校ブレチュコやシュリフチンクからの報告においても、「この事件には、政治的な裏の面がある」という結論を導き出す理由を見つけることはできなかつた。群集の地主に対する批判や、7月15日にベレヤスラフの広場において発見されたこっそり投げ込まれた紙片——そこには、農民たちに向けて、「ユダヤ人を責めるのをやめて、すべての現世的幸福を手に行っている地主を攻撃すべきである」と記されていた——は、ユダヤ人自身の陰謀によるものであると大いなる確信を持って言うことができる。ユダヤ人は、現在明らかになっているように、ある時から、キリスト教徒との会話の中で、上記の紙片の内容と類似したことを暗に言い始めたのである。上記に関して、閣下にご報告いたします。こ

れは、本年7月8日付けの拙報第644号への補足です。県副知事がポルタヴァに戻ってきました。県知事ビリバソフ。(L. d. 189-195)。

第206号

ニジンスキー郡チェルニゴフ県憲兵局長補第326号。ネジン市。写し。秘。チェルニゴフ県憲兵局長殿へ。

本年7月20日、午後8時頃、2人の大人が率いる少年の集団が歌を歌いながら、ネジン市の郊外アヴデエフカを発ち、縁日の広場に向かった。道すがら、ユダヤ人を殴りに行く、と言っていた。このことが警察に知れたが、発生地点に区警察署長と市警察署長が到着する間に、少年の集団にかなり大勢の大人の集団が追いついた。この大人の群集に対して、はじめは区警察署長が、後に市警察署長が、解散の説得に当たったが、すべて無駄骨に終わったため、軍隊を要請した広場に当番の、第66連隊大隊所属中隊が到着し、ひときわ目立った首謀者を逮捕しはじめると、群集は町の郊外に散り、そこでユダヤ人の民家と酒屋を破壊しはじめた。そのため、町の様々な地点に小さな部隊が派遣された。部隊は、最善を尽くして騒乱の鎮圧に努めた。これらの部隊の一つは、将校の指揮下で、かなり大勢の群集と遭遇した。この群集は、将校の説得を無視して、部隊を取り囲み、銃を捨てろと脅迫した。そのため、やむをえず、将校は発砲を命じ、4人が死亡し、1人が負傷した。一晚中乱暴狼藉を止めなかったかなり大勢の群集が、21日の朝に町の中心部に集結し、夜に逮捕された者たちを全員釈放するよう要求しはじめた。しかし、要求が飲まれなかったために、全群集がバザール広場に向かい、ユダヤ人の経営する店やユダヤ人の民家や居酒屋をすべて破壊した。警察は、軍隊の助けを得ながら、いたるところにおいて、暴動を起こしている者たちを追い払った。しかし、後ほど、ほとんど全員が酔っ払っていたので、御すことが難しくなった。酔っ払いは、警察や軍隊に向かって、「あんたらは、ユダヤ人の味方をし、キリスト教徒を殺している」と罵声を浴びせていた。そればかりか、様々な脅迫の言葉を吐き、襲撃のためにかじ棒で武装した。そのため、再び発砲が命じられ、5人が死に、2人が負傷した。一斉射撃の後で、幾人かが広場から立ち去った

が、大多数は、たそがれまでそこに留まり、様々な場所で暴動を続けた。この際、スパソ・プレオブラジェンスカヤ教会の聖職者ピョートル・オギエフスキーの非常識な行為について語らざるを得ない。彼は、一斉射撃があり、何人かが地面に倒れた際に、第66予備役大隊指揮官ネリドフ大佐に近づいて、暴れている群集の前で、大きな声で彼を非難して言った。「あなたは、撃てと命じた。それにしても、このような状況において不適切なことをしたものだ」と。その後、夜はずっと静かであったが、本日午前9時頃、再び少数の集団が集まり始め、難を逃れて残った家々を破壊しはじめた。しかし、これらのグループは、それほど勞せず追い払うことができた。軽騎兵2個中隊が到着し、すべての暴徒を徹底して追い払った。現在、騒乱は停止している。上記につけくわえ、閣下には以下についても報告申し上げる。現在、騒乱は鎮圧されているが、人々は、ユダヤ人のゆえにキリスト教徒の血が流されていることを強く憤っており、警察と軍隊がユダヤ人を買収されていると噂している。また、ユダヤ人がタタール人といっしょになって、キリスト教徒の子供たちを襲うらしいなどという極めて愚かな噂を流したりもしている。(L. d. 201-202)

第207号

ペテルブルク。国家警察局。チェルニゴフからの電報。1881年8月10日付。第343号。8月6日と7日、ボルゼン市において、騒乱が発生し、中心部にあるほとんどすべてのユダヤ人の家屋、酒屋、商店が破壊された。本日、秩序は回復した。

〈注〉1：暗号(数列)は編集部により省略。一編集者。

約16人の首謀者が逮捕された。彼らの処置については、予審判事に一任された。憲兵局長サモイロフ少佐。(L. d. 204)。

第208号

ネジン郡チェルニゴフ県憲兵局長補、1881年8月8日付第352号。写し。秘。チェルニゴフ県憲兵局長殿へ。

本日、私は、ボルゼンスキー郡警察署長から次の報告を受け取った。6日、午後6時頃、ボルゼン市にて、騒乱が発生した。最初、規模は小さかつ

たが、後になって、たそがれ時に、集まった群集が、様々な場所においてユダヤ人の家屋の窓を破壊し、彼らの財産を破壊した。昨日、興奮は続いていた。騒乱を起こした人々のうち、16人が逮捕され、この件については、予審判事に一任された。この後、チェルニゴフ県知事が、ネズン市の軍隊の指揮官フェドルツォフ-マルイシュ連隊長に電報を打ち、ボルゼン市に1個軽騎兵中隊を派遣してくれるよう要請したが、ネズンには合計1個半の騎兵中隊が留まっており、また、当地にはいつも騒乱が起こるといふ噂が立つので、マルイシュ連隊長は派遣できない旨返答した。以上、閣下にご報告いたしますが、本報告の写しを国家警察局に送付したことを添えて申し上げます。原本と相違なし。タムポフォリスキー少佐。(L. d. 219)。

第 209 号

内務省。ポルタヴァ県知事より。官房扱い。秘書課。第 829 号 1881 年 8 月 9 日。ポルタヴァ。内務大臣殿へ。

反ユダヤ騒乱の鎮圧において現地の警察署長を助けるために、ペレヤスラフ郡に臨時に派遣されているクレメンチュク郡警察署長より、以下報告あり。私は、当地において発生した反ユダヤ騒乱の原因を詳しく調べるために、先の 7 月 10 日から現在までペレヤスラフ郡に滞在している。この騒乱には、ある程度外部からの影響があるという考えに至ったのであるが、教唆者を明らかにできる見込みはない。ペレヤスラフ郡におけるこの動きは、主に、キエフ市において起こった騒乱が引き金になって起こったが、他にも、住民の深刻な経済状況、ユダヤ人による搾取が原因としてあった。また、最後に、噂のとおり、キエフの騒乱の後、ペレヤスラフ郡に人々の間に扇動的なプロパガンダが広まっていたことも一因である。このプロパガンダは、住民を興奮させると同時に、この運動の性格と組織をも明らかにしている。このことは、前回の騒乱の際に明らかになったが、現在でも、住民のユダヤ人に対する態度から知ることができる。例えば、ボリスポリやヴォロニコフ、他のペレヤスラフ郡の村の住民はユダヤ人といっさいいかなる取引もしないと決めている。現在まで、郡全体にわたって動揺は続いており、ヴォロニ

コフ村では、7月19日に、郷役場付近に400人近くの群集が集まり、騒乱において逮捕された6人を釈放せよと要求した。また、彼らは、翌日の午後12時までには、すべてのユダヤ人を村から追放すること、郷長を交替すること、いかなるものであれユダヤ人との間の売買をすべて禁止することを求めた。このため、翌日、バザールにおいて、すべての買い付け人に対して最近の人々の対策について警告を与えるために警備隊が立てられた。群集は、7月19日に郷役場に集まり、夜の12時ごろまで立ちつづけた。彼らが解散したのは、まだそこに残っていた30人のもとに行くために、ヴォロニコフに派遣された30人のコサック増援部隊が到着してからのことであった。この部隊を派遣したのは、ポルタヴァ県憲兵副局長プレチュコ大尉が、ヴォロニコフにいる群集について報告したからであった。その後、逮捕者の釈放を求める住民を興奮させるきっかけとなるようなものをこれ以上作らないためには、逮捕者を、ボリスポリに、その後、ペレヤスラフ市に警護つきで送るしかないと警察署長は判断し、それを実行した。ボリスポリのユダヤ人住民は、ポルタヴァ県憲兵局長補シュリフチン二等大尉と同副局長プレチュコに対していかげんなことを言った。すなわち、「ユダヤ人に対する暴動の主犯と教唆者は、地元の地主で、以前調停裁判官であった貴族ヴィクトル・ガヴリロヴィッチ・バタリンである」と。しかし、バタリンが犯人であることを示す明らかな証拠は何一つ見つからなかった。ヴォロニコフ村でそのような教唆の罪に問われていたのは、借地人で、ペレヤスラフ郡の貴族代表、ヴァシリコフスキー連隊長、エヴゲニー・スリヴィンスキーである。しかし、彼についても、いくつかの違法な発言以外明白な証拠は見つからなかった。ボリスポリにおいて7月12日に発生した騒乱の件で、司法当局によって逮捕された者は、全部で16人であった。さらに、コサック人カレニク・プロジェクトコが村人を騒乱に駆り立てただけではなく、騒乱そのものにも参加したことが明らかになり、警察署長はプロジェクトコを逮捕し、この件を司法当局にゆだねた。ボリスポリ村と、ペレヤスラフ郡の19の村において起こった反ユダヤ運動が与えた被害の総額は、157510ルーブル45コペイカ

に上った。以上、7月26日付け第796号への補足としてご報告いたします。
(L. d. 222-224)。

第210号

内務省。ポルタヴァ県より。官房扱い。秘書課。1881年8月12日、第842号。ポルタヴァ。秘。内務大臣殿へ。

コンスタンチノグラード郡警察署長から下記報告あり。本年8月4日、午前4時に、コンスタンチノグラード市の、商人タラノフの店において、「ユダヤ人を殴打せよ」とのアピール文が黒パンで貼り付けられているのが見つかった。8月5日のバザールにおいて、ペスチャンカ村の農民と町民が集まり、3,4人ずつの小さなグループを作り、何かについて話し合っていたが、警察が来るとすぐに四散した。その散り方があまりにも速やかであったため、彼らを探り出すことはできなかった。そうではあるが、いくつかの断片的な言葉が聞かれている。「ポルタヴァで殴った。何もなかった」、「発砲したため、県知事は更迭された」。これらのフレーズでは、騒乱が起こるかどうかについて結論を引き出すにはまだ足りない。しかし、彼、警察署長は、8月6日は祝日であり、ペスチャンカ村から多くの人がやってくるし、上述のようにユダヤ人殴打への呼びかけもあることを配慮し、町に滞在しているオルロフスキー歩兵連隊の連隊長や部隊長と相談して、秩序維持のために次の手段を講じることが必要であると判断した。すなわち、どのような場合でも、警察には中隊の兵士の半数をつけること、この連隊の中隊と地元の小隊は自分の位置にいながら、常に要請に応じて出動できるように準備していること。警察の監視人以外に、もっとも近い区域の警官を2人を町に呼び出した。市長との合意に基づいて、商業委員会委員たちと畑の警備員を、警察に属さず、制服を着ていない者として招請し、彼らに民衆が何を噂しているか、また、秩序破壊に関する事ならなんでも注意して聞き、それを警察に報告するよう求めた。さらに、警察署長は、地元の長司祭に対して、聖餐式の際に、人々にしかるべきことを教えて欲しいと要請し、長司祭は同意した。上記に関して閣下にご報告いたします。上述のアピールの写しを添付し

ます。アピール文を書いた犯人を明らかにするために、郡の警察署長にもっとも精力的な手段を取るように要請いたしました。県知事代理（署名判読不能）。(L. d. 230-231)。

第 211 号

写し。尊敬すべき聴衆のみなさん。注意して聞いてください。我々の堪忍袋の緒は切れました。これらの呪われたユダヤ人を打たねばなりません。我々は、血を流し、必ず復讐しましょう。(L. d. 232)。

第 212 号

ネジン郡チェルニゴフ県憲兵局長補。第 368 号。1881 年 8 月 20 日。ネジン市。写し。秘。チェルニゴフ県憲兵局長殿へ。

ボルゼン警察署長から私に以下報告あり。本年 8 月 16 日朝、イチェン村において騒乱が発生し、17 日の未明まで続いた。集まった群集は、約 500 人で、ユダヤ人の家や店、居酒屋を破壊し、ユダヤ人の資産を完全または部分的に破壊した。騒乱の際に、15 人が逮捕された。逮捕者は、誰によってかは分からないが、釈放された。イチェン村にいるガリツキー連隊の 1 個中隊では、騒乱を鎮圧するには不十分であることがわかった。本報告の写しを原本といっしょに国家警察局に送付した。原本と相違なし。トムポフォリスキー (L. d. 233)。

第 213 号

内務省イグナチエフ伯爵閣下へ。スタロドゥブ町民より。は、スタロドゥブに住んでいる。

1〈注〉原本の文体そのまま。編集者。

現在、ユダヤ人に対して襲撃と破壊が起こっているが、実際、理由も原因もまったくなく、特に、エリサヴェトグラード、キエフ、ペレヤスラフ、ボリスポリ、ネジン、他の郊外地において状況はそのようである。破壊の程度があまりにもひどく、被災者のもとには、一頭の牛も一つの食べ物も残っていない。スタロドゥブには「まもなく、ユダヤ人への殴打が始まるだろう」との根強い噂があり、ユダヤ人への反対を呼びかける甘い提案が書かれてい

る宣伝ビラが放り込まれているのが見つかった。昨日、私は、群集の中の何人かと出会い、国家当局の不十分な処置について互いに話し合っているのを聞くことができた。彼らは外見からすると、教養のある人々のようであった。私は、今、このことについて警察に報告する義務がある。しかし、私は、我々には、いわば、生みの父親であるイグナチエフ伯爵がいることを思い出し、これらの発言を閣下に個人的に報告するほうがよいと考えたのである。このことに関して、謹んでお願い申し上げます。これらの地獄の言葉について注意を払い、考慮し、至急ご判断を賜りますように。これらは、スタロドゥップ市に現れた我々ユダヤ人社会に敵対する言葉です。我々には、まず神の御前に、ついで閣下に向かって叫び声を上げる以外にはなくなりました。どうか父親が子供たちをあわれむように、我々をあわれんでください。庇護をやめないでください。我々のつらく悲惨な生活を顧みてください。我々は、閣下の健康を毎朝毎晩神に祈ります。私はまだ自分の名前を明かすことはできません…。スタロドゥップ。1881年8月20日。(L. d. 235-236)。

第 214 号

内務省。ポルタヴァ県知事より。官房扱い。秘書課。1881年8月21日。第873号。ポルタヴァ。秘。内務大臣殿へ。

私の管轄県のいくつかの地において続いている、原住民のユダヤ人住民に対する憤激の感情を考慮し、さらに、イリンスキーの縁日が終了し、特別に平静が乱される恐れがないため、県の都市から離れることができると判断したため、私は、7月30日にハリコフ市に向かった。それは、臨時ハリコフ総督に、上記の興奮状態の外面的性質をくわしく報告し、住民を平静にさせるためにどのようなことをすればよいか閣下の指示を受けるためであった。7月31日に、ハリコフにおいて、私は、閣下からの電報を受け取り、騒乱の鎮圧のためにはもっとも精力的な予防措置を取れとの指示を頂戴し、その後、私は、すぐにドゥブヌイに向かい、8月の1日から2日にかけて夜半に到着した。ドゥブヌイにおける騒乱の実際的な側面は、次の点に現れている。すなわち、5月と6月に、町じゅうに、ユダヤ人を殴れ、と呼びかけるビラが貼り付けられた。

そして、噂によれば、その具体的な日付が記されている場合も何度かあった。(これらのビラは、適宜、取調べのために県憲兵局長に提出した)。7月27日、朝、多くの酔っ払いを含む40人近くの町人が、市役所わきの町人役場に集まり、市外のユダヤ人をドゥブヌイから追放するように要求した。その際、概して、「俺たちはユダヤ人のせいで生活できない」という訴えが聞かれた。最初は市長が、次に警察署長が、長い時間をかけて彼らに説明すると、彼らは、解散した。しかし、しぶしぶ、ゆっくりとであった。騒乱の予防のために、強い酒の販売を差し控えさせる措置が取られた。夕方、バザール広場に、再び100人以上の群集が集まり、騒ぎたち、「万歳」の叫び声を絶え間なくあげ続けた。警察が解散するように説得しはじめると、群集は、ユダヤ人に対する不平を言った。「俺たちは、奴らを通して何も買えない。奴らはパテン師で、俺たちは奴らに我慢がならないのだ」と。時折、警察や市当局に向かっても「あんたらは、ユダヤ人を守っている」と悪態をついた。軍の巡回隊がやってくると、群集は叫び声をあげながら四散した。しかし、家に帰ったのではなく、郊外のポドリに移動したのであった。ポドリでは、ユダヤ人経営する居酒屋と商店が1軒ずつ破壊された。遊撃連隊の中の、市に駐留していた騎兵中隊が騒乱の現場に派遣され、再三の説得の後、ついに、力で暴徒たちを解散させた。しかし、この群集の一部は、1軒のユダヤ人居酒屋を破壊することに成功した。その居酒屋は、市から約2露里の場所にあり、修道院所有の堰の近くにあった。暴徒の中の数人が逮捕された。7月28日市郊外のザスリヤ村に、80人ほどの群集が集まった。ほとんど全員が酔っ払っており、ユダヤ人の家を破壊しようとしていた。遊撃騎馬中隊と共に現地に向けて出発した警察署長は、途中でルブヌイ市に向かう20人ほどの酔っ払った人々と出会った。彼らは、叫んだり悪態をついたり、命令されても、言うことをきかず、立ち止まらなかった。そのため、兵士が彼らを鎖で縛る処置を取ったが、彼らは鎖を突破したため、ルブヌイ市に入る際に逮捕された。そして、激昂しながら、7月27日に逮捕された人々を釈放するように要求した。ひどい場合には、町のユダヤ人全員を殺してやるとすら言った。この際に、数人が逮捕され、残りの群集は、遊

撃隊によって駆逐された。7月28,29日夕方に、群集は再びバザール広場に集結したが、騎馬中隊の援軍により、四散した。8月2日にかけて夜に、群集は、ユダヤ人の墓地において、番小屋を破壊し、そこで暮らしていたユダヤ人の財産を略奪した。その墓地において、いくつかのユダヤ人の墓碑が破壊された。警察と軍隊の一部が急いで到着したが、暴徒たちはすでに四散しており、彼らと遭うことはなかった。市の近郊の村コノノフカとオリシャンカにおいて、ユダヤ人の居酒屋が破壊された。

上記の事実とは別に、私は、郡貴族長や郡会長、市長、警察署長、管区裁判所検事、調停裁判官、郡会農民問題常設委員、予審判事、暴動を目撃した人々の口から、騒乱の性格に色付けをする多くの詳細な報告を聞いた。また、町の住民の生活の経済状況を現場で間近に見た。その結果、私は、ルブヌイにおける騒乱は、地元のユダヤ人が搾取を行ったから起こったのではなく、他の地域における騒乱の前例に刺激されたのと、自分の目的を達成するために手段を探している悪意の有る人々の教唆によって起こったと確信するにいたった。このような確信に私が導かれたのは、次のデータを考慮したからである。

- 1) ルブヌイにはユダヤ人が少なく、彼らはまったく目立つ存在ではないし、地元住民への抑圧という形でのユダヤ人の搾取などまったくない。もしユダヤ人がここに住むことが願わしくないならば、それは、ただ地元の手工業者や小商人にとってそうなのである。彼らにとって、ユダヤ人は、工業と商業の競争相手である。
- 2) 騒乱が始まるまえに、煽動的な宣伝ビラがまかれた。
- 3) 騒乱は、他の地域と同様に、常に夜行われ、昼には起こらなかった。また、略奪と極端な凶暴行為（ユダヤ人墓標の破壊）が伴った。
- 4) 騒乱に参加した者の中で、宿無しのプロレタリアートは比較的少数であった。彼らの大多数は、主人のもとで、働く労働者であり、主人の賄いに頼っている。彼らは、調査員への供述の中で、凶暴行為の理由として、生活必需品の市価の高騰をあげている。彼らは、あたかも、これが、ユダヤ人による食料品の買い戻しによって起こっていると言うのである。しかし、主人の賄いで食っている彼らの状況を考慮すると、このような供述には無理があることは明らかである。
- 5) 最後に、住民

の圧倒的大多数は、少数の人々による暴力行為を眉をしかめて見ていただけではなく、哀れみの気持ちすらも抱いていたのである。そして、この暴動がさらに発展すると、自分の財産にも被害が及ぶのではないかと心配していたのである。上記のデータと考えに基づいて、私は、「もっとも決然とした手段を速やかに講じ、すでに起こっている騒乱を鎮圧するだけでなく、将来の平静も確保することが必要がある。というのも、8月5,6日に縁日が始まるからである」と確信するに至った。

7月27日の騒乱の際に逮捕された人々の中に、調停裁判所に引き渡された人が何人かいた。調停裁判所は、すべての犯人を調べ、以下の人々を禁固刑に処した。町人マトヴェエフ：3ヶ月。農民ガミンと町人コマリ：1.5ヶ月。退役兵スシュコフ、町人ネステレンコ、農民シロチュク：10日。彼らにこの判決に対する控訴の手續きと期間について説明し、その時まで収監されていた監房から彼らを出した。彼らは7月31日に釈放されたが、8月の1日夜から2日朝にかけてユダヤ人の墓とそこに付属している家が破壊された。現場において、この騒乱に参加した人々に1人も遭うことはなかった。しかし、確実に言えることは、この、略奪を伴う新しい形の騒乱は、騒乱において明らかに犯罪を犯したのに牢屋から解放された前述の人々の誰かによって指揮されていたわけではなかったが、しかし、彼らの釈放は、住民の中の秩序を守らない人々の目には、実質的に「似たような行動をしても罰を受けることはない」ということの証明と映り、新しい暴力行為の発生に疑いもなく影響を与えているのである。このため、私は、当局が類似した犯罪を厳格に追及するということを住民に対して速やかに伝えることが必要であると思い、再度、上記のすべての人々を逮捕し、厳格な護衛付で、町を経由して、ポルタヴァに送り、当地の刑務所に収監するよう命令した。「未決囚を騒乱参加のために牢獄に拘留した者たち全員の発言によれば、騒乱の主犯と参加者は、以下のとおりである。すなわち、貴族ヤコヴェンコ、町人ズプコ、シェニピチコ、ママライ、コヴネル、ダラガン、退役兵ベスソノフ、予備役兵シュマトウコ。彼らは騒乱の際に逮捕されず、自由の身であった者たちで、社会の安寧にとってきわめて危険な存在で

ある」と予審判事の発言を聞いて、私は、名前のあがったすべての人々をすぐさまルベンスキー監獄に収監するように命じた。その結果、彼らの告訴が明らかになったので、彼らの拘留について、予審判事により決定が下された。ルブヌイにおいてユダヤ人の墓が略奪されたのと同時に、8月1日夜から2日にかけて、町の近くのコノノフカ村においてユダヤ人の居酒屋が破壊された。これらの騒乱は、明らかになったところによると、そこに住んでいた貴族で地主であるヤノフスキーの密告と教唆によって起こった。この男は、放埒な生活をしており、私は、彼を逮捕して、ポルタヴァ監獄に送った。これらの処置（とくに、逮捕者を護衛付きでポルタヴァに送致）は、人々に望ましい印象を与えた。8月3日に、住民は平静を取り戻し、ルブヌイや郊外の村のどこにおいても騒乱は起こらなかった。8月5、6日にかなり大規模な縁日がつつがなく開かれた。

私は、このような厳しい処置によって騒乱の発生を抑えた。また、それと同時に、そのような措置を市当局の側から取らせることに腐心した。これらの措置は、厳しい性格を持たないので、新しい騒乱発生を予防する可能性をもっとも高めることになるだろう。この方向で、ルブヌイ市の議会において、次の施策が取られた。1) 警官が一時的に増員され、月50ルーブルの手当てが支給された。2) 警備員7人にさらに6人が追加された。3) 手工業者に、労働者を調べ、秩序の攪乱や安寧の破壊など何か望ましくないものが見つかった場合には、それを警察や手工業会長に連絡することを義務付けた。4) すべての居酒屋におけるコップ酒の販売が中止された。5) 警察官の権利と義務が定められた。また、町の郊外にある農家10軒について、そのうちにいる老人一人一人に毎月10ルーブルが支払われることになった。6) この期間の警察のパトロールにかかる費用を市が支払うことになった。以上、7月30日付けの電報の返答として、閣下にご報告いたします。さらに、以下ご報告いたします。ルブヌイ市とルベンスキー郡とは別に、私は、ルブヌイ郡に隣接する諸郡（ホロリスキー、ミロゴロツキー、ピリヤチンスキー、プリルクスキー、ペレヤスラフスキー）の全域をも見回り、反ユダヤ感情の高まりという意味において現在

危険性のある個別ケースについての、様々な種類の申し出や指示を検討し、住民の感情を鎮めるべく努め、市当局に対して、社会の安寧と騒乱の再発防止のための施策に直接的・实际的に参加するように呼びかけた。それ以来今日まで、県の全域において、ユダヤ人に対する暴力行為が存在しないという意味で、秩序は保たれ、平静が保たれている。県知事ビリバソフ。(L. D. 237-244)。

第 215 号

内務省。チェルニゴフ県。官房扱い。第 5299 号。1881 年 8 月 23 日。チェルニゴフ。

内務大臣殿へ。ボルゼン郡において 8 月に起こった騒乱についての私の電報の補足として、閣下に、本日届いたこのテーマに関する詳細な情報をお伝えいたします。8 月 6 日に、ボルゼン市のバザールに集まった地元住民と郊外村の農民たちは、商いが終わった後でもバザール広場に残り、かなりの数の小グループに分かれて、活発な話し合いを始めた。午後 5 時 30 分に、ユダヤ人(商人)と農民との間に、いさかいが起こった。その理由は、後者がタバコを買ったのに代金を払わなかったからである。ユダヤ人が農民を殴ると、群集がユダヤ人のもとに殺到した。ちょうど現場に来た警察が喧嘩を止め、解散するように説得したが、群集は拒否した。一人の農民が、きわめて激しく警察の行動を非難したので、警察は彼を逮捕した。この後、30 人ばかりが店の建物の後ろに集まり、彼らのうちの一人がユダヤ人の小机を壊したが、すぐに逮捕された。別の店の裏手にも、誰か酔っ払った農民が、大声で群集に向かってユダヤ人を殴れと叫んでいた。警察が彼を逮捕すると、群集が執拗に彼を逃がすよう要求し、暴徒の群れに属さない何人かの要求を考慮して、警察は縄を解き、彼を広場から遠くに連れていった。彼の後ろには、かなりの数の群集がついていったので、バザールの一部に空間ができた。警察署長は、この状況を利用し、その空間に軍隊を入れ、まだ残っていた群集を押し返し、バザール全体を包囲した。しばらくして、たそがれになり、町の郊外の数箇所において、大小の騒ぎ声が響いた。郊外の村々ブリャコフカ、ポドクナシェフカ、カイロ

ドフカのユダヤ人の家に対してポグロムが始まった。2個中隊しか配置されていなかったのも、警察署長は、バザール広場を軍隊に占領させたままにして、商業センターから離れることにした。暴徒たちに占領された郊外には、巡回部隊を派遣し、26人を逮捕した。11時30分に、200人ほどの群集は、モスクワ通りを通って、町の中心部に移動した。警察署長は、この通りを軍隊で封鎖した。彼は、軍隊の前に立って、群集を3つの方向に分散するように誘導したが、後になって、「法により、軍は、従わない者に対して軍事行動を取る」と宣言すると、群集は四散した。その後、町の反対側において、ユダヤ人ラモフスキーの家の夏用建築物が、放火により燃え出した。夜2時ごろに、騒乱はおさまった。41件のユダヤ人民家と墓が破壊された。警察署長の賢い処置により、ユダヤ人の財産の中でもっとも高価なものが置かれている商業センターは、無傷で残った。

8月7日、群集の興奮は続いていた。群集は、バザールに集まり始めたが、軍隊によって追い返された。この日、ガリプキーとアルハンゲロゴロツキー連隊の3個中隊が到着し、増援された。8月8日の夜に、ユダヤ人ラビノヴィッチの居酒屋が破壊されたが、タイミングよく投入された巡回部隊が騒乱の拡大を防いだ。8月9日日曜日、バザールに集結した群集の間に、激しい興奮が見られた。午前12時に、ユダヤ人と酔っ払った玉ねぎ売りの婦人との間に、喧嘩が始まった。人々は叫び声をあげながら殺到したが、巡回部隊がそれを阻止し、ユダヤ人とその婦人を逮捕した。午後2時にプリルクスキー通りにおいて、かなりの群集が集まり、バザール広場に向かい始めたが、警報によって呼び出された軍隊によって追い散らされた。8月10日の夜に、ユダヤ人が経営する売春宿が破壊された。これでボルゼン市における騒乱は終わったが、それと同時に、郡の次の場所において騒乱が始まった。コズィニェツ村：8月8日夜に、2軒のユダヤ人民家が破壊された。アレノフカ村：8月9日夜にユダヤ人の商店と2軒の民家が破壊された。ヴィソーキー村：8月6日ユダヤ人の居酒屋に対して襲撃があった。プストヴォイトヴィー村：5人の農民（名前不詳）が、ユダヤ人アグラノヴィッチの家の窓と窓枠を破壊した。シャポヴァロ

フカ村：8月6日にコサック人グリゴリー・サフチェンコが農民ステパン・トカチェンコとダニイル・サフチェンコに「ユダヤ人を打て。ステパンには7ルーブル、ダニイルには5ルーブル出すから」と教唆した。8月9日、兵士イヴァセンコは、居酒屋において、ユダヤ人に立ち向かうよう人々をたきつけた。警官が彼を逮捕すると、農民ミヤレンコが逮捕者を護送していた補助警官に襲い掛かり、その一人を杭で殴った。イヴァンゴロド村：8月9日に、居酒屋の経営者コサック人フェドリヤクは、多くの人々にウォッカを飲ませ、ユダヤ人を殴れと唆かした。8月10日、バザールにおいて約300人の群集がユダヤ人を襲う予定の人々が到着するのを待っていたが、地元の郷警察署長によって排除された。

村落部における騒乱の予防のために、私がボルゼン市に派遣した顧問官ラザレンコは、警察署長と共に、郡のいくつかの地域で軍隊による巡回を実施し、人々を説得して回った。イヴァンゴロド村には、1個中隊が駐屯していた。ボルゼン市において、顧問官ラザレンコは、市長を通して、市に対して、市の平和の回復のために協力を申し出た。議会は、この提案に満場一致で賛成した。その際、町人会は、なぜ人々がユダヤ人に敵意を抱いているか、それは、住民の経済生活すべてがユダヤ人の手に握られており、ユダヤ人は彼らを搾取し、彼らに傲慢で、凶々しい態度を取るからだ、と述べた。もしユダヤ人を完全に追い出すことが不可能ならば、彼らが土地を買い、それを貸すことができないようにして欲しい、また、ヴォッカやパンを商うことができないように禁令を出して欲しい、と要請した。ボルゼン市とアレノフカ村のコサック人也会も、口を揃えたかのように、同じ不平と要請の言葉を述べた。ユダヤ人のキリスト教徒住民に対する異常な態度が呼び起こした、反ユダヤ感情は、概して、ユダヤ人の商売を全滅させることに非常に関心のある多くの人々の影響下で発展することが常である。このため、夏の労働が終わると同時に、騒乱が不可避免的に繰り返されるのである。とくに、私が重要視しているある一つの事情に注意するならば、このことが明らかになるのである。その事情とは、ボルゼンの騒乱に参加した罪で警察に逮捕された26人のうち、24人は裁判所によって、

監視下から解放され、彼らのうちの幾人かは、再び騒乱に参加した、ということである。騒乱の他の参加者は、調査において明らかにならなかった。かくして、500人の群集が引き起こしたボルゼンの全騒乱の責任者は、たったの2人であり、ネジンの騒乱の責任者は20人だけである。というのも、他のすべての責任者も、監視から解放されたからである。これはすべて、住民に対して、「騒乱を起こしても罰せられない」という印象を与え、「政府は、ユダヤ人に対する暴力行為について追及されない」という愚かな噂を生んでいる。県知事代理、副知事バチュマノフ。(L. d. 245-247)。

第216号

ネジン郡チェルニゴフ憲兵局長補、1881年8月24日、第279号。ネジン市。写し。秘。チェルニゴフ県憲兵局長へ。

イチユニャ村において本年8月16日に起こった騒乱は、最初、少年たちによって引き起こされた。少年たちは、群集によって、ユダヤ人が小さな物を売っている小机の近くに集められ、ユダヤ人をからかい、冗談に商品の小机から「商品を」つかみ始めた。これをユダヤ人が邪魔しようとし、その結果、騒動が起こった。そのとき、大人の群集が急いでやってきて、小机をひっくり返し、商品を強奪し、ユダヤ人の民家、店、居酒屋を破壊しようと殺到した。騒乱は17日の朝まで続き、軍隊が来るまで、郡警察署長は騒乱を鎮圧できなかった。また、郷長も村も援助せず、騒乱の鎮圧のために何も対策を講じなかったことも失敗の原因であった。群集による暴力行為の際に、16人が逮捕された。彼らは、逮捕された状態で郷役場に送られたが、誰かの手でそこから釈放され、再び17日に逮捕された。家、店、居酒屋や他の施設が全部で27軒破壊され、損失は1013ルーブルに上った。現在、イチユニャはまったく平穏であるが、万一に備えて、さらにガリツキー歩兵連隊の1個中隊が現地に派遣された。17日にイチユニャにやってきた予審判事は、この件に関して調査を行った。上記について閣下に報告すると同時に、この報告書の写しを添付し、国家警察局に送ったことをも申し添えます。トムポフォリスキー少佐。(L. d. 248-249)。

第 217 号

ハリコフ臨時総督。1881年8月5日、第1221号。ハリコフ市。秘。内務大臣殿へ。

4月に、南部の諸地方において発生したユダヤ人の資産に対する騒乱は、大変な努力の結果、鎮圧された。政府当局、犯人追及における司法当局の精力的な活動、多くの逮捕、ユダヤ人居住地への軍隊の配置、南部全地における豊作による労賃の大幅な上昇があれば、これらの騒乱が夏の間に再発するのを防ぐことができると思われた。しかし、6月にポルタヴァとチェルニゴフ両県において発生した悲しい事件は、次のことを証明した。すなわち、「たとえ住民を一時的に安心させたとはいえ、すべての見積もりは間違っていたことが明らかになった。また、当局に対する露骨な反抗や敵対行為を伴った騒乱の再発防止のためには、精力的な手段を講じざるを得なかった。この手段によって、きわめて悲しく望ましくない結果がもたらされた」と。現在、これらの騒乱は、再発していないが、将来においてそれを予防するためには、当局はさらに長い間、軍隊の駐留によって、騒乱の恐れがある地域の住民を守らねばならなくなるかもしれない。地元当局は、他の予防手段をまったく持たない。というのも、郡や市は、この件に対しては、まったく無関心であり、1874年6月27日の、「農民平和法の改正に関する法律」の施行と共に、農民に対する監視はまったく行われなくなってしまったからであり、さらに、警察はすでに長期間、しかるべき権力と意義を失い、さらに、その成員もまったく不十分なものだからである。他方、反ユダヤ感情は、ますます大きくなっている。いくつかの地域において、ユダヤ人に対する最初の暴力行為は、キリスト教徒住民を目覚めさせ、自らのユダヤ人に対する関係を調査により明らかにするように促した。この調査の結果、次の点が明らかになった。「ほとんどのユダヤ人は、もっとも貧しいキリスト教徒住民の勘定で生活し、養われている。この地位を得るために、きわめてけしからぬ、また、犯罪的ですらある手段が用いられている。ユダヤ人は、自らほとんど何も生産せず、国家の全生産力を貪欲に利用することに専念する完全な組織を持っている。暗愚な人々にとって、自らをユダヤ人

の搾取から守ることはまったく不可能である。政府自身には、ユダヤ人に勝ち、彼らに法律に従うよう強制する力はない」。ユダヤ人に対するこれらの告発は、残念なことに、きわめて重要な（事実？）によって確認されている。私は、これらの事実のうちいくつかをここで紹介することが必要であり、また同時に、次の点を指摘しなければならないと考えるのである。すなわち、「現在の状況では、実質的に自らをユダヤ人から法的に防衛することは不可能ではないか、暴力行為に走る以外にはないのではないか」と住民に疑わせる根拠が存在する、ということである。

居酒屋経営者のユダヤ人は、人々に飲酒癖をつけさせているというのは万人が認めるところである。このことは、ずっと以前から政府も認めている。政府は、住民を守るために、居酒屋の数を減らし、ユダヤ人居酒屋店主の有害な影響を排除するために、一連の対策を講じた。例えば、酒類販売に関する規則第 306 条を制定し、ユダヤ人は自分の家でしか酒を販売できないと定めた。また、この規則の第 323 条第 9 項において「村内での酒類の販売は、村会の同意なしには行えない」とした。同第 449 条では、酒類販売者が酒類販売規則に違反した場合には、住民の要請により、酒類販売店を閉鎖することが定められた。これらの 3 つの法律は、もしそれらがきちんと守られたならば、ユダヤ人——彼らはチェルニゴフとポルタヴァ県の居酒屋のほとんどを所有している——の搾取から住民を守ることができるだろう。しかし、これらの法律は、ただ机上のものでしかないのである。酒類販売に関する規則第 306 条は、大蔵省の解説により、効力を失った。というのも、大蔵省は、『ユダヤ人の持ち家』を、『他人の土地に立っている家』とも捉えるべきだ」と解説したからである。これにより、ユダヤ人は、架空の取引やまったく非合法的な取引を利用して、完全な脱法ができるようになった。間接税課が、土地所有者の土地に居酒屋を開く権利を与える際に、権利受領者から「当該の土地は農民の居住地内にはない」ことを示す証明書を要求していないために、同第 323 条第 9 項は、まったく守られていない。さらに、第 323 条に規定されている「農民の居住地の境界線」は、大蔵省の通達に記された解説によってきわめて狭

く解釈されるようになった。同第449条は、居酒屋を閉鎖することができる担当者を規定していないため、効力を失った。さらに、この法律は、居酒屋を閉鎖する担当者を個人的責任で脅している。この担当者が何に対して責任を負っているかすら規定せずに。住民は明らかに、上に列挙した法律が守られていない理由は、一方で、ユダヤ人の陰謀があるからであり、他方で、地元当局が背任行為を犯している——たしかに、これは、事実、酒税に関する我々の財政システムの遺産なのであるが——からであると考えている。このような、疑いもなくユダヤ人の利益に偏重した法律解釈が、人々に「法律は万人にとって拘束力がなければならない」ということを納得させられなかったのは当然である。人々がアル中になっているにもかかわらず、ユダヤ人は、地元の住民に法外な利率で金を貸したり、他のあらゆる手段を講じて、彼らを搾取している。農民はかつて農奴の権利があったため、似たような搾取から完全に守られていたが、現在、彼らは、ますますユダヤ人への経済的依存を深めている。ユダヤ人は、様々な取引を利用して、これらの暗愚な人々を騙しているのである。市民生活のあらゆる局面において自分の力に頼り、適切に設立された農業クレジットや法的保護機関を持たず、まったく知的に未熟であった農民たちにとって、自分たちに張り巡らされた罠から抜け出る可能性はまったくなかったため、全家族が土地を失い、貧困の中に落ちていくことがしばしばあったのである。このように苦悩の中にあつた人々は、ユダヤ人の非良心的な行動を十分に理解しているのであるが、当局がユダヤ人との間に結ばれた取引を双方にとって法的拘束力があるとみなしているので、(訴訟手続きの細部を理解していない)幼稚な人々は、「ユダヤ人との取引において、法律や政府の人々に頼ることはまったくできない」と結論せざるを得ないのである。以上、農民について述べたことはすべて、町人にも当てはまる。これらの人々は、農民たちが農奴的依存から解放されるまで、現在よりも比較的良好な立場にいた。それは、以前、賃労働は彼らにとって楽であつたからである。現在、町人の日常生活は、以前よりも安全を欠いている。彼らは、分与地を持たず、穀物畑耕作を主な生業とし、小規模な産業に部分的に従事している。この小規模産業において、彼ら

は絶えず、手段を選ばないユダヤ人と衝突しているのである。ついでながら、最近開かれたチェルニゴフ県の貴族集会においても、「ユダヤ人は、市外の土地を買い付ける権利を不正に利用している」という意見が表明された。この意見は、「地主が所有し、農民に分与するために残しておいた領地の全部または一部をユダヤ人が獲得することを無条件で禁止するという規定（第3項及び第4項）が、1861年2月19日に法制審議会によって定められ、皇帝の承認に基づいて決定された」という事実に基づいている。しかし、1862年4月26日にユダヤ人の制度に関して委員会が皇帝の承認のもとに行った解釈によって、この法律は「現行の諸法律により、ユダヤ人があらゆる種類の土地を獲得することはまったく禁止されない」という意味に解釈されたのである。きわめて多くの人々が、このような種類の解釈を、事情から生じたものではなく、ユダヤ人の陰謀によると考えているのである。ユダヤ人による地主の土地の買い付けや賃借は、ほとんど常に、買い付け人や賃借人の策謀と結びついているのである。さらに、ユダヤ人にとって、土地を獲得したり管轄することは、住民に対する搾取の強力な手段となっている。というのも、ユダヤ人が土地を買い付けたり賃借するのは、通常の耕作のためではなく、主に、土地と賃金を必要とする農民や町人との関係において独占的地位を獲得するためだからである。このような搾取の手段によって、概して、土地所有者たちは困難な立場に陥っているのである。チェルニゴフ県やポルタヴァ県において、ユダヤ人はかなり大規模に土地を獲得しており、その結果、多くの農民は耐えがたい状態に置かれているのである。私が知る限りでは、これらの2つの県における農民問題は、農民側の損失という形で解決されている。けしからぬ脱法行為によって、農民たちは、多くの領地において、完全に土地を奪われた状態にあるからである。ユダヤ人たちは、このようにして国のすべての生産力を搾取しているのだが、同時に、他のほろもうけの手段を決して逃さず、法律や政府当局からのあらゆる種類の要求を回避するために方法を見つけ出している。盗まれた馬の受け渡しを担当するユダヤ人が一枚噛まなければ、馬泥棒はけっして成立しない。彼らは兵役義務をけっして果たさない。彼らは賦役にほとんど参加しない。すべて

のユダヤ人の商売や産業は、ほとんどが詐欺に基づいている。その手口のほとんどは巧妙であり、あらゆる刑罰を避けるように仕組まれている。一言で言えば、市民生活のあらゆる局面において、ユダヤ人は、ロシア人と国家の秩序に敵対する黒幕であり、個人としても政府としても、地元の住民が、彼らと合法的に戦うことは不可能である。それゆえ、人々の間に「政府はユダヤ人を破滅させることを許した。他の方法によって、政府がユダヤ人を抑えることはできないからだ」という考えが定着したのかもしれない。上記のすべてから分かることは、チェルニゴフ県とポルタヴァ県の農民たちは、土地制度に対してきわめて大きな憤りを感じており、土地の境界線を定める際には苦しい立場に置かれ、自由な時間を引き渡したことをまだ根に持っている。それゆえ、少数の例外を除いて、彼らにとっては略奪団でしかないユダヤ人に対して、彼らが憎しみを抱いたとしても、まったく当然のことなのである。今日チェルニゴフ県とポルタヴァ県に存在する人々の感情は、どのような政治的手段を講じても変わらないだろう。多くの労をかけ、軍隊を投入し、武器を使用することによって法秩序と平和が維持されたとしても、住民の気持ちをおさめる他の手段を講じない限り、たださらなる憎悪を産み出すほかはないのかもしれない。事態を望ましくない段階に至らせないためには、住民に、「政府は住民の状態と、きわめて精力的にあらゆる場所において表明されている彼らの陳情に対して真摯な関心を抱いており、彼らの公正な欲求を満たすために対策を模索し始めている」ということを分かりやすく示すべきである、と私には思われる。政府がこれらの陳情に対処していることをはっきりと示し、彼らの期待の目を政府の行動に向けさせれば、住民の興奮はすぐに収まり、彼らがさらなる抗議や暴力に走ることはないだろう。また、チェルニゴフ県とポルタヴァ県の農民の状態に注意を払う必要があるだろう。彼らを、町人であるキリスト教徒の数が少なく、農民の生活が守られている西の諸県や、きつい賃仕事がなく、住民が土地について不足を感じていない北ロシアの諸県と比較することはできない。そのため、私は、チェルニゴフ県とポルタヴァ県において、県知事を長とする特別委員会を早急に設置し、会議に専門家を招き、メンバーに県から職員を派遣す

る権限をそれに与えることが必要であるとする。これらの委員会は、きわめて短期間のうちに、ユダヤ人に関するすべての法律を検討し、最下層の住民をユダヤ人の搾取から守るための方策を講じるべきである。これらの委員会が行った仕事は、ペテルブルクにおいて組織された中央委員会において検討され、最終決定にかけられねばならない。この中央委員会には、最大の活動と情報を提供する県委員会のメンバーが出席しなければならない。まず県の委員会において、問題の予備的検討が行われなければならないと私が考えるのは、まず第一に、地元の委員会は、地元住民と直接に関わることができ、彼らに「政府が、提起された問題を引き受けた」ということを確信させることができるからである。また、第二に、県の委員会における予備的検討を行えば、この過程で専門家が誕生するからである。彼らの知識は、ペテルブルクにおいて問題の最終的な決定を下す際に大いに役立つであろう。さらに、私は、チェルニゴフ県とポルタヴァ県における農民土地制度に特別な関心を払い、「地元当局が黙認してきた制度の悪用を是正することが可能であるか」考える必要があると思う。これは、農民問題に詳しい人物を顧問として、非公開に行うべきだと考える。これらの私の考えを閣下にご検討いただき、その結果をご通知願いたし。侍従武官長スヴァトポルク・ミルスキー公。(L. d. 250-259)。

第 218 号

D・I・スヴァトポルク・ミルスキー公へ。ドミートリー・イヴァノビッチ公。閣下の報告 8 月 5 日付第 1221 号について、下記通知する。

私は、ユダヤ人問題の解決に関して検討し、この問題に関する閣下の見解に同意し、閣下がすでにご存知のように、閣下の見解の中で示された解決策を受け入れた。上記の報告第 1221 号の中で示された、「チェルニゴフ県とポルタヴァ県における農民土地問題に関心を向け、地元当局が黙認してきた制度の悪用を是正することが可能であるかについて考える」必要性について言えば、これらの方策は、人々の動揺の格好のきっかけとなる土地境界線問題を引き起こさざるを得ないという危険性を含んでいるため、現在の危険な時期においては、実現不能のように思われる。さらに、政府が、チェルニゴフ県とポルタヴァ県

の農民たちの福利（彼らの状態について閣下は配慮されている）にとって効果的な手段を検討すると、なおさら実現は困難になるだろう。私の見解では、この手段とは、移住のための組織と、農民の必要と習慣と対比された、安くて、きわめて利用しやすい融資である。今示された方策の第一のものは、すでに実行に移されている。第二のものは、政府の特別な配慮の対象であり、まもなく決定されるだろう。敬具。第5163号。81年9月1日。イグナチエフ伯爵の署名。(L. d. 260)。

第219号

N・P・イグナチエフ伯爵閣下。(秘)。

法務大臣、宮内官ナボコフは、謹んでニコライ・パヴロヴィッチ伯爵閣下に、スタロドゥップスキー管区裁判所検事がキエフ控訴院検事にあてた提案書（本年8月2日付第183号）の写しを、この手紙に添付して、拝送いたします。この提案書は、ノヴォズィプコフスキー郡警察署長が提示した、ノヴォズィプキ市における対ユダヤ人騒乱防止対策に関するものです。——読み終わりましたら、上記紙を返却願います。第15914号。1881年8月22日。(L. d. 261)。

第220号

写しの写し。秘。キエフ控訴院検事閣下。スタロドゥップスキー管区裁判所検事より。

本日、8月2日、私は、ノヴォズィプコフから帰った。閣下に、なぜ私が緊急に出かけなければならなかったかについて説明したい。7月30日に、ノヴォズィプコフ郡警察署長ファリコフスキーからチェルニゴフ県憲兵局長サモイロフ少佐あてに次のような内容の電報が届いた。「早急にノヴォズィプコフに来られたし。検事殿も来られるならなおよい。」しかし、サモイロフ少佐は、7月29日にチェルニゴフに出向き、憲兵局長としての任務をこなしていた。憲兵たちは電報を打ち、それが私に届いた。私はすぐに、警察署長に、サモイロフ氏をスタロドゥップから発せると打電し、チェルニゴフ憲兵局長へは、ノヴォズィプコフに憲兵将校を派遣する必要があると打電した。ノヴォズィプコフには私も7月31日夕方に到着した。ノヴォズィプコフ区検事補ヴィソコ

ヴィッチは、私の質問について、まったく何も知らない様子で、「どうしたのですか?」と尋ねてきた。というのは、警察は、危険な事件について彼には何も知らせていなかったからだ。警察署長ファリコフスキーは、私と、私の後にやってきた憲兵局副官に向かって、我々両者が呼ばれたのは、今にも始まりそうなユダヤ人ポグロムを予防するためにどのように対処したらよいか意見を聞くためであると述べた。というのも、家々に、「ユダヤ人への攻撃が迫っている」と記されたビラが貼り付けられ、「ノヴォズィプコフは放火されるだろう」との匿名の手紙が警察署長のもとに届き、「ロシアの平民が、ノヴォズィプコフ郡の様々な集落や村からユダヤ人を追い出すための部隊を組織している」との報告が郷警察署長の一人から届いたからである。警察署長は、これについて、「騒乱の発生はきわめて現実味を帯びており、すでにチェルニゴフからノヴォズィプコフにむかっている5個の歩兵中隊が到着するまでの間、町や集落、村は、罰する者がいない状態で襲撃に遭う恐れがある。ノヴォズィプコフだけではなく、郡においても、民衆を騒乱にたきつけている者たちが数人いる」との考えを述べた。警察署長は、監視対象者の全リストを読み上げた。「私の手元には、これらの人々が実際に危険人物である証拠はまったくないが」——と、ファリコフスキーは説明した。——「彼らが事実そのような人物であることを信じている」。私は、ノヴォズィプコフ警察署長に、「現在手元にあるデータを分析すると、唯一の予想しか導き出せない。このような状況においては、1871年5月19日の法律に基づいて予備的調査や取り調べを行うべき根拠はない。私の個人的な意見によれば、現在の状況、とくに、最近ネジンでポグロムがあったという状況は、事実、深刻であり、騒乱を未然に防止するという意味において、警察署長によって計画された『反ユダヤ党指導者の郡からの追放』は、きわめて適切な行政手段であった」と述べた。

民衆のユダヤ人に対する憤激をたきつけている人物として警察署長が疑いをかけている人物は2人いる。それは、ノヴォズィプコフ調停裁判官会弁護士クリャпка・コレツキーと、ノヴォズィプコフ公証人ブダゴスキーである。前者は、あらゆる手段を使って、人々の前で政府が任命した当局者の面目をつ

ぶすことを常としているような人物から評判を得ている。他のすべてのことについては、弁護士クリャプカ・コレツキーと、様々な邪悪な仕事を彼とともにやっている貴族イェルチェンコが同情し、支援してくれている。イェルチェンコは、その政治的危険性のゆえに、警察から密かに監視されている。実際のデータがないので、「クリャプコとイェルチェンコが反ユダヤ党の指導者である」ということを敢えて保証するつもりはないが、しかし、ノヴォズィプコフ警察署長の「これらの人々は、ユダヤ人問題に関して人々に悪い影響を与えており、騒乱の鎮圧において当局が困難に陥っていることをからかおうとしているのである。また、クリャプコ・コレツキーは、言葉巧みな弁護士であり、言葉はきわめて文学的であるが、実際やっていることはきわめて不誠実である。彼は、ことのついでに、自分にとっていくつか興味のある刑事事件の弁護を行うことをも目的としているのである」という推測を大いに信じている。もと砲兵隊将校であった公証人ブダゴスキーについては、一般の評価によれば、きわめてまじめな人物であり、政治的な危険性は今日まで少しも見えない。警察署長ファリコフスキーは、「ブダゴスキー（ポーランド系）の周りにポーランド人の小さいが影響力のあるグループが集まっている」という。警察署長が彼を疑う理由は、この点だけである。警察署長は、憲兵局副官を説得して、ブダゴスキーが政治的に危険な人物であると、チェルニゴフに打電させた。私の確信するところによれば、ノヴォズィプコフの警察署長が公証人ブダゴスキーを、行政的追放に値する人物のリストに載せたのは、正しい処置ではなく、個人攻撃である。本年7月まで、警察署長ファリコフスキーと公証人ブダゴスキーは、良好な知己の関係にあったが、7月に、彼らの間に、次の問題をめぐって争いがあった。すなわち、ノヴォズィプコフのクラブの部長会が、ダンス会の開催を思いつき、書面でファリコフスキー氏に「国家が喪に服している時期に、警察署長としてクラブでダンスをすることができるか」と問い合わせた。警察署長は、部長会に対して「もしボズで亡くなった皇帝陛下の喪がダンスの障害とはならないと考えるなら、それはできる」と答えた。この警察署長の煮え切らない返事に、部長会は非常に立腹した。部長であり責任者であるブダゴスキー

は、ファリコフスキー氏にかなり辛らつな手紙をかいた。彼は、その中において、3月1日にロシアに加えられた大きな損害に対するクラブの部長や、公けの立場にはない私人たちの悲しみは、警察署長の公人としての悲しみよりも強く、深いものであるかもしれない、と述べた。この手紙を受け取ったときから、ファリコフスキーは、ブダゴスキーの敵になった。県知事に嘆願したが、まだ決定を得ていないと言う。これこそ、ノヴォズィプコフの警察署長がブダゴスキーを、ユダヤ人迫害を教唆したために行政的追放処分の対象者リストに載せた理由である。彼は、私（検事）に、ブダゴスキーの告発の証拠はない、と述べたのである。ブダゴスキーや他の人々を騒乱教唆罪のゆえに郡から追放すべきだとの警察署長の嘆願は、チェルニゴフ県知事には聞き入れられていないので、新聞特派員が好む題材——政治的危険人物の行政的追放権の悪用——として一連の新聞記事に登場することもないだろう。私は、区検事補ヴィソコヴィッチが、来るべき騒乱について知らされていないのはなぜか、という疑問をぶつけたが、警察署長ファリコフスキーは、憲兵局副官の同席の場で、「この事例では、私は、検事補を信用していない。それは、ヴィソコヴィッチ氏は、ポーランド人であり、ポーランド人であるブダゴスキーに対して偏った見方をする恐れがあるからだ」と述べた。もちろん、私は、警察署長に対して、「自分の考えに基づいて、検事補を彼の任務から遠ざけないでいただきたい。あなたの配下に置かれた検察機関に属する人物の政治的危険性については、キエフ控訴院検事閣下にお任せなさったらどうだろうか」と言った。警察署長ファリコフスキーは、この件について、私の副官であるヴィソコヴィッチに内緒で処理する必要があると考えていたのだ。それは、私が、区検事補の意見に影響されて、警察署長の考えを偏って評価することのないためであった。ヴィソコヴィッチは、けっして政治的に危険な人物ではない。彼が、ポーランドのグループに対して偏った見方を示したことは一度もない。ノヴォズィプコフの警察署長がチェルニゴフ憲兵局職員と同席のもとで下した、私の副官の政治的信念に対する偏った評価は、なおさら〔私を〕侮辱するものであった。ファリコフスキーの陰謀は、失敗した。私がノヴォズィプコフに出かけるまで

の数日間に、ファリコフスキーとブダゴスキーの争いの本当の理由が私とスタロドゥプスの人々全員に知れることとなった。おそらく、この争いは、サムイロフ少佐にも知られているだろう。私は、彼がこの件については、誠実に注意深く対処してくれると、確信している。以上、閣下にご報告いたすと同時に、ノヴォズィプコフ郡やスタロドゥプ司法区全般はまったく平静であると申し述べます。1881年8月2日。第183号。スタロドゥプ市。オリジナル。検事N・コスチェンスキー署名す。(L. d. 262-265)。

第221号

秘。内務省。国家警察局長。S・V・シャホフスキー公閣下へ。セルゲイ・ヴラジミロヴィッチ公。

ノヴォズィプコフ市において反ユダヤ活動が始まる恐れがあるため、地元警察署長ファリコフスキーは、彼が教唆の疑いをかけている人物のリストを作成した。その中でももっとも主要な人物は、調停裁判弁護士クリャプコ・コレツキーと、ノヴォズィプコフの公証人ブダゴスキーである。前者は、実際に、評判が悪い人物である。その上、彼には、イェルチェンコ（貴族）という協力者がいて、ともに後ろ暗い活動に従事し、その政治的危険性により、警察の監視下にある。クリャプコとイェルチェンコが、反ユダヤ党の指導者であることを示す実際のデータはないが、ノヴォズィプコフの警察署長の、「彼らは人々に悪い影響を与えている。騒乱の鎮圧にてこずっている当局の苦境をあざ笑おうとしている」という発言には信頼性がある。公証人ブダゴスキーについては、一般の評判によれば、彼は、まったく立派な人であり、政治的に危険な人物ではない。警察署長ファリコフスキーの彼に対する反感は、彼らの間にある陰悪な関係が原因である。これは、ブダゴスキーがノヴォズィプコフのクラブの指導者であった時に、喪の期間にダンスをするべきかどうかという問題が持ち上がり、それについてファリコフスキーに手紙を書いたことがきっかけとなって起こった。ファリコフスキーが、証拠もないのにある人物を上記のリストに載せたという事実は一般に知られている。地元の検事補ヴィソコヴィッチに対するファリコフスキーの態度は、無礼であり無神経である。ファリコフスキー

は、「検事補はポーランド人だから信頼できない」と言って、騒乱が近づいていることをヴィソコヴィッチに知らせなかった。以上、閣下に報告いたします。敬具。第 5232 号。1881 年 9 月 3 日。ヴァチエスラフ・プレヴェ。(L. d. 267-268)。

第 222 号

ペテルブルク電報局長補。第 48 号。1881 年 9 月 1 日。秘。V・K・フォン・プレヴェ閣下へ。ヴァチエスラフ・コンスタンチノヴィッチ。

本文に添付して、昨日 8 月 31 日夜にオルロフスキー政府電報局に届いた第 2982 号電報の写しを閣下に送信いたします。この電報は留保されており、電報文において指定されたあて先には配信いたしません。

敬具 V・——署名判読不能。(L. d. 269)。

第 223 号

アリョルよりリガへ。8 月 31 日。電報第 2982 号。カバルキンと家族へ。以下に写しを送信。ギンズブルク、トゥフ、レヴェンバルク、メイエル、グルヴィツ、レフシュテイン、シヤスコリスキーへ：

Unser Gouverneur hat Ordre erhalten sammtliche Junden Oreler, Ieletzter, Livner, Briansker, in ausserst kurzer Zeit hinauszuweisen. Wir sandten eine Deputation Petersburg Geben sie sich Muhe dass Rigaer Kaufleute so tort nach Petersburg an Minister Finanzen und Minister des Innern der Wahrheit gemass telegraphiren, dass Rigaer Getreide-Geshaft dadurch grossen shaden erleiden wird, da sammtliche Getreidenhandler Orel verlassen müssen. Ein Gleiches geschicht wahrscheinlich in diesen Tagen in Kursk und anderen Gouvernements Russland. Ihre Telegramme werden uns hoffentlich Nutzen bringen. Drahtantwort, ob solche schritte gethan. Wachtel, Freudenstein, Lifschitz, Widrin, Katzenelenboge. (L. d. 270-271)。

第 224 号

内務省。チェルニゴフ県より。官房扱い。第 5485 号。1881 年 8 月 29 日。チェ

ルニゴフ。内務大臣殿へ。

イチユニヤ村において始まった騒乱に関して、私のもとに報告があった。それに基づき、私は、すぐに県庁顧問官ラザレンコを現地に派遣した。これらの騒乱の発生原因に関する詳細な情報を集めるだけではなく、指定地域における平和の回復に向けて対策を講じるためでもある。今、私は、顧問官ラザレンコから報告を受けたので、その詳細を閣下にご報告する。

ボルゼン郡南部の商業の中心地であるイチユニヤ村には、キリスト教徒しか住んでいない。ここに居住するユダヤ人家族はたったの50世帯だけであり、農民から借りた家に住んでいる。ユダヤ人が自分で所有している家は4軒しかない。酒を貯蔵した地下室とぶどう酒店を持つ商人タタルスキーを除けば、他のすべてのユダヤ人は貧乏であり、きわめて小さな商いに従事している。かなり広大で肥沃な土地の、この商業センターのすべての富と力は、キリスト教徒の手に握られている。このような状況のゆえに、イチユニヤ村では、反ユダヤ活動の土壌はまったく存在しなかった。実際、騒乱が始まるまで、すなわち、8月16日前に、住民の感情は非常に穏やかで、警察だけではなく、ユダヤ人自身も騒乱が起こることをまったく予想していなかった。裕福な地元のユダヤ人の一人、商人タタルスキーが述べたように、彼が自分の高価な物を隠し始めたのは、やっと騒乱が始まってからのことだった。イチユニヤ村で騒乱が始まるという、非常に漠然とした、まったく何の根拠もない噂話が地元の警察署長の耳に届いたのは、8月14日のことであった。自分にとって特別の意味はないと考えたが、警察署長は、来る8月15日が教会の祭礼日であることを考慮し、イチユニヤに中隊を呼び戻すように郷警察署長に要請した。これらの中隊は、イヴァン・ゴロド村で8月9日に騒乱を起こすという計画が発覚したため、その地に移動していたのである。さらに、警察署長は、イヴァンゴロド村にも軍隊を置く必要があると考え、平和が一度も破られたことがないプリスキ村にあった1個中隊をその地に派遣するよう要請した。警察署長は、この嘆願の説明にまったく満足できなかった。そのため、プリスキにいた中隊を、貴族の代表者の言葉によれば、群集が集まり、騒乱を起こす準備を整えていたシヴォロ

ジュ村に、移動させた。警察署長は、「地元の状況から軍隊を置く必要性がさらに高いと思われるイヴァンゴロドに配置された1個中隊しか、現在のところ、派遣できない」と郷警察署長に伝えた。8月16日朝、警察署長は、具警察署長から「イチュニャだけではなくイヴァンゴロドにも軍隊を駐留させる必要があることが分かったため、イヴァンゴロドの中隊の半分をイチュニャ村に移動した」という報告を受けた。郷警察署長のこのような措置は、「中隊を二分できない」という現在の指示と調和しないと考えた警察署長は、電報配達人を通じて、イヴァンゴロドに残っていた半中隊指揮官、エリエツ少尉補に、イチュニャにいる半中隊とすぐに合流するように命令した。しかし、エリエツ少尉補は、警察署長から午後4時ごろに命令を受け取ったのに、なぜか分からないが、翌朝になるまでイチュニャに入らなかった。また、警察署長は、プリスキからイヴァンゴロド村に、騒乱は起こらず貴族代表の訴えが根拠のないものであることが分かったシヴォロジャ村から帰営した1個中隊を移動した。かくして、騒乱が起こった8月16日に、イチュニャ村には31人の兵卒しかおらず、そのため、郷警察署長は平和破壊を阻止できなかったのである。

騒乱そのものは、次の状況において発生した。8月16日早朝に、2人の男子を含む幾人かがユダヤ人ラピンの屋台をひっくり返した。郷警察署長が現場に到着したが、そこにはすでに誰もいなかった。朝8時頃バザール広場に、主に地元住民から成る群集が集り、小さなグループを個別に形成したが、郷警察署長の強い要求により、解散した。午前11時に、かなり大勢の群集がコサック人ピョートル・ダラガンの居酒屋の周りに集まり、群集の中から2人の少年がユダヤ人バサンスキーの住宅の窓を破壊した。郷警察署長が彼らを逮捕すると、彼らはすぐにこの過失をそそのかした人物としてコサック人メニコの名前を挙げた。少年と一緒に逮捕されたメニコは、郷役場に拘留され、監視下に置かれた。そこから戻った郷警察署長は、コサック人プシユカリが、ユダヤ人スコモロフの住宅の窓を割っているのに気づき、すぐに、彼を逮捕し、郷役場に送った。しばらくしてから、バザールに集まった群集が村の郊外に移動し、ブジョフカ村へ向かう途中で3軒のユダヤ人居酒屋を破壊した。群集の

指導者は、最近まで郷役場に拘留され監視下にあったコサック人プシュカリであることが判明した。その後、群集は、ユダヤ人タルコフスキーが借りていた家に向かって突進したが、兵士によって撃退された。彼らはそこから村の中心部に向かい、道中で何軒かのユダヤ人の居酒屋を破壊し、バザール広場に現れた。郷警察署長と中隊指揮官は、彼らに解散するよう説得したが、彼らは聞かなかった。郷長がそこにいた人々を非難し、暴徒たちを説得すると、群集は解散し、秩序は回復し、何時間かそれは乱されなかった。夜9時に通りにおいて、暗闇の中から人々に騒乱を呼びかける声が聞こえた。指導者はグルコ、スコベレフなどの名前で呼ばれていた。口笛が鳴ると、群集はユダヤ人バサンスキーの店に殺到したが、バザール広場にいた軍隊によって撃退された。次の店に殺到したが、そこでも追い返された。再び静けさが戻り、30分ほどそれは続いた。この後、群集は再びバサンスキーの店に殺到し、略奪を始め、監視のために配置されていた兵隊めがけて石や杭を投げつけたが、兵隊によって撃退された。学校や浴場にも殺到したが、そこからも追い返された。暴徒には女性も加わって、かなりの数に膨れ上がった。彼らは、ユダヤ人タルスキーの家を取り囲み略奪を始めた。兵士たちは、タルスキーの地下室の周りを並んで立ったが、群集たちは、悪口を言いながら、彼らめがけて石や杭や家具の切れ端を投げ始め、3人を負傷させた。ついに、群集は兵隊と肉弾戦に突入り、地下室を破壊した。酒の一部が床に撒き散らされ、原因は不明だが、燃え上がった。それから群集は、バザール広場に向かい、小さなユダヤ人の店を破壊しはじめた。そのうちの軒において撒き散らされたマッチが燃え上がった。兵士たちが火を消している間に、酔っ払った群集は、様々な方向に向かい、女性たちだけが撒き散らされた物を拾って持ち逃げした。朝の4時までに騒動は収まった。翌日、騒乱が再発したが、すぐに鎮圧された。破壊されたユダヤ人の家屋、商店、屋台の数は、全部で34あり、ユダヤ人の言葉によれば、13,000ルーブルの被害があったが、この数字は、かなり誇張されたものである。というのも、イチユニャ全部のユダヤ人は、少しの例外を除いて、きわめて貧しく、高価な物をまったく持っていないからである。イチユニャでの全

騒乱における逮捕者総数は、顧問官ラザレンコの報告には明らかにされていないため、私は、これらを報告するよう彼に求めた。さらに、郷役場に拘禁されていたコサック人プシュカリがどうやって自由になり、暴徒の群れの指導者になったのか明らかにするようにも彼に命令した。以上、閣下にご報告いたします。結論として、閣下には、中隊を二分し、イチユニャとイヴァンゴロドにそれぞれを配置したという郷警察署長ハリユチンの不正な行動について、私は、県庁に裁量を委任するが、エリエツ少尉補が警察署長の命令に速やかに従わなかったことについては、第5歩兵師団長に伝えた。県知事代理県副知事（署名判読不能）。（L. d. 272-275）。

第 225 号

内務省。チェルニゴフ県知事より。官房扱い。第 5603 号。1881 年 9 月 4 日。チェルニゴフ。内務大臣殿へ。

昨 8 月 29 日付第 5486 号への補足として、閣下に以下ご報告いたします。顧問官ラザレンコの報告によれば、8 月 16 日のイチユニャ村における騒乱の際に逮捕された人々の数は、現時点で明らかにできない。地元の郷警察署長は、騒乱の際、明らかに茫然自失しており、いったい何人を逮捕したか正確に覚えておらず、大体 40 人くらいと言っている。数人の逮捕者が、郷警察署長本人によって郷役場に送られ、他の逮捕者については、兵士や私人に郷まで送り届けるよう依頼した。せわしない時期や、秩序が乱れている時期に一般にありがちなように、逮捕者への監視は非常に緩やかだったので、予審判事が到着するころには、逮捕者の数は 15 人しかいなかった。逮捕者の中でも、ニコライ・プシュカリは 2 度逮捕された。最初に逮捕されたときに、彼は隠れることに成功し、その後、再び 8 月 16 日に他の逮捕者とともに逮捕された。これらのすべての人々は、予審判事によって釈放されるまで郷役場に拘留されていた。執行された逮捕について決定はくだされず、逮捕者のリストすら作成されなかった。イチユニャに予審判事がやってきた時に、彼は、警察の取り調べなしに予備調査を始め、騒乱についての郷警察署長の報告しか参考にしなかった。さらに、判事は、32 人を被告として訴え、そのうちの 2 人を監獄に入れ、

残りは、コサック人プシュカリを含め、警察の監視下に置いた。8月26日のために顧問官ラザレンコによって集められた、イチュニヤ村コサック人及びキリスト教徒共同体は、騒乱に対してまったく共感できないと表明し、説得による秩序の回復に協力することを約束した。また、似たような事件が再発した場合には、当局に協力するとも述べた。同じ日に作られたグジョフカ村コサック人及びキリスト教徒共同体も、平和を乱さず、ユダヤ人に危害を加えないと約束した。翌日、顧問官ラザレンコは、イヴァンゴロド村の、ヴロムスカヤ郷の共同体も集め、8月28日にはパラフィエフスカヤ郷のそれも同様に集めた。彼らは御名、秩序を厳守し、平和を乱さないことを約束した。最後に、閣下に以下報告いたします。郷警察署長と地元村当局が、逮捕者を厳格に監視しなかったという不当な行動について、また、郷警察署長がイチュニヤにおける騒乱についてしかるべき報告を行わず、逮捕について記録を取らなかったことについて、私は、県庁に判断をゆだねます。県知事代理、県副知事（署名判読不能）。(L. d. 276-277)。

第226号

戦争省大臣。参謀長扱い。第1630号。1881年9月11日。N・P・イグナチエフ伯爵閣下へ。ニコライ・パヴロヴィッチ伯爵殿。

国家警察局の命令下、憲兵局将校によって行われた取り調べにおいて確認された、「オリヴィョポリスキー連隊第7遊撃隊第4騎兵中隊指揮官メデム男爵騎兵大尉が、本年4月24日、エリサヴェトグラード郡ボクリタロフカ村において起こった騒乱の鎮圧にあたって、越権行為を行い、さらに、現地住民たちから代価を払わずに、自分の騎兵中隊の兵卒用にヴォッカと食料の提供を強要したという深刻な訴え」に関する情報をオデッサ軍管区長に報告した結果、また、「4月23日に、エリサヴェトグラード郡ヴィチャゼフ村での騒乱鎮圧に際して、第2中隊の兵卒部隊を指揮していた同連隊陸軍中尉アルブゾフの同様の違法行為」に関する皇帝侍従武官団少将クタイソフ伯爵による報告を考慮した結果、侍従武官長ドンドウコフ・コルサコフ公は、第7軍団長に、これらの件に関する詳細な調査のために信頼できる人物を派遣するよう命じた。前

第7軍団長侍従武官長リヒテルの命令のもとで、第13騎兵師団第2旅団長ゴルダノフ少将が行った調査から次のことが判明した。

1) メデム男爵騎兵大尉は4月24日に騎兵中隊といっしょにポクリタロフカ村に到着し、住民たちが村郊外に集められているのを見た。彼がいる前で、住民たちは、村長に対して「ユダヤ人を打てとの皇帝の文書を見せてくれ」と要求していた。メデム男爵が「そんな文書は存在しない」と言い、「秩序を取り戻してくれ」と求めると、からかって大胆に答えた。その際、メデム男爵は、従者の2人の警官に対して、「暴徒の中でもリーダー的な者や、ユダヤ人の家の破壊と略奪において積極的に活動していた人物を他から引き離せ」と命令した。かくして、20人ほどの人々が分離され、罪の大小に応じて、4つのカテゴリーに分類された。この基準にしたがい、騎兵大尉メデム男爵は罰を下した。処罰は、ユダヤ人の家屋の破壊の1週間後に実施されたが、それは、上述の破壊行為に対する報いではなく、4月24日に起こった騒乱を鎮圧するためであった。住民の騒乱の内容は次のようなものであった。彼らは、村長に対して「ユダヤ人を打て、との皇帝の命令文書を見せて欲しい」と要求した。平静になることを命じた村長や、警官、騎兵大尉メデム男爵に対して反抗した。彼らは、オセトニヤシュカ村とアヴラモフカ村の住民を処罰しようと準備していた。彼らが処罰されるのは、ポクリタロフカ村において自分の財産が略奪された際に、そこから逃げてきたユダヤ人をかくまったからである。警官ドヴィシュコフの証言によれば、ポクリタロフカ村の住民は、翌日杭を持って、オセトニヤシュカ村に向かう予定であった。アヴラモフカ村への襲撃のために、彼らは斧を研ぐことすらしていた。この情報は、エリサヴェトグラード郡第1郷警察署長マトコフスキーの耳に入った。彼は、当時、病気のため任務についていなかったが。メデム男爵によるポクリタロフカ村民への処罰は、郷警察署長だけではなく、郷警察署長の報告にもよれば、望ましい結果を生んだ。というのも、これによって大量殺戮を防げたからである。もしポクリタロフカ村民が、「オセトニヤシュカとアヴラモフカの村民を襲う」という自分の意図を実現できていたら、大量殺戮は容易に起こりえたであろう。この時から、興奮は明ら

かに静まり始めたのである。ポクリタロフカ村民の処罰は、それがいかに精神的に行われたにしても、郷警察署長の報告によれば、折檻の名に値しないものであった。というのも、a) 処罰は、通常の百姓用の鞭で行われたからである。b) この同じ日に、処罰を受けた幾人かは、処罰からほどなく、迫害を再開したからである。これは、彼らにとって処罰がどのような結果をもたらすかよく示しているのである。c) ポクリタロフカ住民の誰も、郷宿営に出向いて、折檻について不平を述べたり、彼らの検査について表明しなかった。この事実を、郷警察署長は重視した。というのも、ポクリタロフカ村民は、自分の裁判の経験から、もし勝機が自分の側にあれば、これを必ず利用するからである。ポクリタロフカ村民は、泥棒として有名であり、きわめて凶暴な性格を持つ。この村の24軒の農家のうち、裁判で宣告を受けて牢屋に入ることがない家長は2人しかいないのである。残りの家長のうち、幾人かは、軍隊の懲治中隊だけではなく非軍事官庁の懲治中隊にも何度か入ったこともある。この村は、犯罪者の村である。というのも、懲治中隊で自分の期間を務め上げた人々を受け入れ、収容しているからである。他の共同体は、自分の権利を利用して、そのような人物を仲間として受け入れないのであるが。ポクリタロフカ村を発つ前に、騎兵大尉メデム男爵は、隣りのオセトニャシュカ村に人を遣って、騎兵中隊のためにバケツ1杯のヴォッカを求めさせ、そのとき4ルーブル50コペイカを支払った。このことは、警察署長、郷警察署長、2人の警察官が確認した。それゆえ、「騎兵大尉メデム男爵は、ユダヤ人ポヴォロツキーから無料でヴォッカを受け取った」という噂は、まったくの虚偽であることが明らかである。このユダヤ人は、たしかに、ヴォッカを出しただけではなく、すすんで飲んでくださいと頼みすらしたのである。

2) 警察署長補の要求に基づいて、4月23日に自分の上司からヴィチャゼフカ村に派遣された陸軍中尉アルブゾフは、現地到着後、そこで、警察署長補及び警官と出会った。村長が、警察署長補に、「逮捕者の一人が衛所を破壊し、他の非逮捕者の地元住民が、騒乱で逮捕された人々を力づくで解放しようと努力している」と報告した。これらの犯罪者は、兵卒から20回から30回の鞭

打ち刑に処せられた。警察署長補が出発した後に、さらに5人が逮捕された。彼らは、隠れていて、警察署長補が出発するのを待って、再び現われ騒乱に参加した人々であった。これらの5人は、警官と郷長によって名指しされ、それまでの騒乱者とまったく同じ刑罰を受けた。それゆえ、7人が処罰され、しかも、その処罰は軽いものであった。糧食と飼料について言えば、それらは、警察署長補や村長の指示により、隊に届けられたのであって、一方からの強制はなく、きちんとお金が支払われた。計算の際には、糧食の本当の値段である35ルーブルよりも多く支払われ、その領収書もある。上記の報告を行った侍従武官長リヒテルは、以下をも付け加えた。「これらのことを知って、私が確信したのは、『騎兵大尉メデム男爵と陸軍中尉アルブゾフは、たとえ完全に遵法的とはいえないまでも、大変精力的な方法で、きわめて大きな仕事をし、騒乱を起こそうとする悪い企図を芽のうちに摘んでしまったのである。この騒乱は、恐るべき規模にまで発展する恐れがあり、虐殺すら容易に起こりかねなかったのである』ということである。それゆえ、上記の将校による明らかな貢献を考慮し、また、いかなる拷問もなかったのである以上、彼らにいかなる責任も問わないようお願いする」と。上記や、ゴルダノフ少将による取調べの際に明らかになった状況のゆえに、オデッサ軍管区指揮官は、前第7軍団長に完全に同意し、騎兵大尉メデム男爵と陸軍中尉アルブゾフに責任をまったく問わないことにした。私は、侍従武官長ドンドウコフ・コルサコフ公が下した、「メデム男爵とアルブゾフ陸軍中尉に対して起こった訴えに関して、彼らに責任をまったく問わない」との上記の結論に賛同するが、しかし、この件についてさらに処置を進める前に、また、内務省にはこの件に関する上記の状況の報告が皇帝陛下侍従武官団少将クタイソフ伯爵からあったはずであるので、閣下には、この件に関してご自分の結論を下されないようお願いする。敬具。ピョートル・ヴァンオフスキー。(L. d. 278-284)。

第227号

第112号。写しの写し。秘。

ご要請に応じて、私は、エリサヴェトグラード郡ヘルソン県憲兵局長補殿

に以下通知いたします。実際、エリサヴェトグラードから25露里離れたヴラジミロフスカヤ郷ポクリタロフカ村において、4月24日、第7遊撃オリヴィオポリスキー連隊の遊撃騎兵隊が、ポクリタロフカ村のユダヤ人財産の破壊及び略奪に参加した地元農民20人に体刑を加えた。略奪と破壊は、マニ・フォンシュテインの居酒屋（被害額合計200ルーブル）、借地人ヤンケリ・グラノヴィッチ（被害額合計900ルーブル）、ゲルシヨク・ポヴロツキー（同400ルーブル）、スリリ・メルニコフ（同200ルーブル）のもとで起きた。

体刑は下記のように行われた。ポクリタロフカ村の住民は、品行不良で、少数の女性と子供を除けば、泥棒の罪で裁判にかけられたことがない人はおそらくいないだろう。騒乱の後、ポクリタロフカの村民は4月17日に、上記の4人のユダヤ人の持ち物を破壊し、略奪した。さらに、ナイフを手に持って、彼らを殺すぞと脅した。彼らは、取調べのためにやってきた地元警官を阻止し、隣村アヴラモフカの住民を、斧をちらつかせて脅した。というのも、アヴラモフカの村民が、ポクリタロフカの住民によって略奪の被害にあったユダヤ人を村にかくまったからだ。警察の措置もポクリタロフカ村民には効果がなく、彼らは反抗を止めなかったので、騒乱の際にエリサヴェトグラード市にいた第7遊撃オリヴィオポリスキー連隊騎兵中隊の中の1個中隊がエリサヴェトグラードからノヴォミルゴロド市に戻り、途中でポクリタロフカ村の隣のオシトニャシュカ村で宿を取った際に、私は、第7騎兵師団長皇帝陛下侍従武官団コシチ少将に、オシトニャシュカ村にいる騎兵中隊をポクリタロフカに派遣し、興奮している住民に秩序を取り戻すよう呼びかけて欲しいと頼んだ。コシチ少将の同意を取り付けて、私は、第1区警官コロメイツェフにこの要請を託して、彼をオシトニャシュカ村に滞在している騎兵中隊長のもとに派遣した。騎兵中隊がポクリタロフカ村に到着すると、地元警官ドヴィシュコフも現れた。かくして、ポクリタロフカには、遊撃隊の到着後、2人の警官がいたことになる。騎兵中隊長は、農民たちを集めるように命令し、まず彼らに感銘深い言葉を述べ、その後、ドヴィシュコフ警部に、略奪の首謀者を見つけるように命じた。隊長は、自分の判断で彼らを鞭打った。その際、受刑者の中で不具になった

者はいなかった。これは、墓場の中ではなく、その近くの広場で行われた。広場には、他の場所からやってきた農民たちがおり、地元のユダヤ人が見物していた。1881年6月9日、エリサヴェトグラード。オリジナルに、エリサヴェトグラード郡警察署長ドゥブロヴィンスキーの署名あり。(L. d. 285-286)。

第 228 号

第 218 号。写しの写し。秘。ヘルソン県憲兵局長補より。5月21日付。第314号。1881年5月14日付国家警察局の指示第2986号に対する返事。

この指示について、ヘルソン県憲兵局長殿に以下ご報告いたします。ポクリタロフカ村において、ユダヤ人の財産の破壊と略奪に加わった20人の地元農民に対して行われた体刑について非公開で行った調査に関して、次のことが明らかになった。4月15,16日にエリサヴェトグラード市において発生した騒乱の後、エリサヴェトグラード郡ヴラジミロフスカヤ郷ポクリタロフカ村の農民たちは、同月17日に同村に住むユダヤ人4人の財産を破壊・略奪した。この際、彼らは手にナイフを持って彼らを『殺すぞ』と脅した。パーヴェル・ドヴィジコフがこのことを知り、取調べのためにポクリタロフカにやってくると、興奮と酩酊状態にあったこの村の農民たちは、彼をこれに近づけさせなかった。彼らは、隣村アヴラモフカの住民が、略奪の被害にあってポクリタロフカから逃げてきたユダヤ人をかくまったことに因縁をつけて、彼らをナイフで襲うと脅した。ポクリタロフカの農民たちが警官に逆らい、反抗を続けたので、秩序を回復するために、オシトニヤシユカ村から第7遊撃オリヴィオポリスキー連隊第4騎兵中隊が派遣された。この騎兵中隊の隊長、騎兵大尉メデム男爵が7月24日にポクリタロフカにやってくると、彼は、墓地のすぐ近くの広場に農民たちを集めて、まず彼らに感銘深い言葉を述べ、それからドヴィジコフ警部に、騒乱の首謀者を指名させ、ドヴィジコフ、コロメイツェフ両警部、隣村の農民、地元ユダヤ人の見ている前で、ユダヤ人の財産を奪った犯人20人を逮捕し、彼らにきわめて激しい鞭打ち刑を科した。その際、農民アフナーシー・ザレンプ、アンドレイ・ミハリチェンコ、ピョートル・ソクレンコには300打、5人の農民に200打、7人に150打、1人に100打、騒乱に

参加しなかった2人の老人にも100打、騒乱に参加した子供たちには短い革鞭で50打が加えられた。これについては、この刑罰は、メテム男爵が自分の判断で加えたことであり、また、このような農民に対する厳しい刑罰の許可を彼は上司から得ていなかったことが明らかになっている。300回の鞭打ちを受けた農民のうち2人は、現在にいたるまで病に伏している。しかし、これら2人も、他の受刑者も不具にはなっていない。上記すべてについて、また、次の事実について私は黙っていることはできない。すなわち、体刑の後で、感謝の印として、ユダヤ人借地人でチギリンスキー町民ゲルシヨム・レイボフ・パヴロツキーが、第4遊撃騎兵中隊に、3杯のパケツに入ったウォッカを与えたのだ。兵隊たちは、それをすぐに飲み干した。これらの知らせは、ポクリタロフカの農民から得たものであり、私の配下にある補充随員の下士官に伝えられた。1881年6月11日、エリサヴェトグラード。オリジナルには、エリサヴェトグラード郡ヘルソン憲兵局長補、二等大尉フォン・レヴィス・オフ・メナルの署名あり。(L. d. 287-288)。

第229号

P・S・ヴァノフスキー閣下へ。ピョートル・セメノヴィッチ殿。

閣下の本年9月11日付第1630号の手紙について、以下ご通知いたします。私のもとにある当初の情報によれば、第7遊撃オリヴィオポリスキー連隊の将校たち——騎兵大尉メテム男爵と陸軍中尉アルブゾフ——が、エリサヴェトグラード郡における反ユダヤ騒乱を鎮圧するために取った措置は、彼らに与えられた権限を越えている。しかし、ゴルダノフ少将がこれらの将校について行った調査の結果に関して、閣下が伝えてくださった情報を考慮すると、私の側には、オデッサ軍管区長の要請を満たすのにいかなる障害も存在しないのである。私は、閣下の御意見に従って、騎兵大尉メテム男爵と陸軍中尉アルブゾフを、この件に関するさらなる責任から解放することができると考える。敬具。イグナチエフ伯爵の署名。第5659号。1881年9月28日。(L. d. 289)。

The Analysis of the Materials on 1881 Pogrom (6)

Tomobumi KUROKAWA

ABSTRACT

The purpose of this paper is to analyze the historical materials, Материалы для истории антиеврейских погромов в России (Materials for Anti-Jewish Pogroms in Russia), and to describe the pogroms in Ukraine in 1881. The materials were published by the Russian government in Petrograd in 1919 and 1923, covering the pogroms between April and September in 1881. The materials are consisted of the two parts; the first part is of the official reports on the pogroms by the provincial governments to the central government, the second part is of the reports by count P. I. Kutaisof, sent by the central government to examine the pogroms in Ukraine. He describes the pogroms almost chronologically not only from governmental view point but also from the general public view point.